

江口草玄における初期書学期の鈴木鳴鐸『碧樹』・『蒼穹』の影響についての考察

松矢 国憲

平成三十年(二〇一八)年五月二十六日から七月一日にかけて当館で開催した「白寿 江口草玄のすべて」(以下「白寿展」)の資料調査の中で、戦後、草玄が上田桑鳩に師事する以前、独学していた時期、複数購読していた競書誌の中に鈴木鳴鐸(註1)主宰の『碧樹』・『蒼穹』(図1・註2)があった。草玄の書家としての生涯における鳴鐸、そしてこの競書誌の影響については白寿展で紹介し、解説も加えたが、同展および同展図録では、全てを詳細に提示することはできなかった。本稿では、白寿展終了後の同年秋十一月十六日に他界された江口草玄氏の生涯における鈴木鳴鐸からの影響について、『碧樹』・『蒼穹』誌および、鳴鐸との手紙から詳細に考察を加えたい(註3)。

一、江口草玄の初期書学の状況

江口草玄が書に興味を持ったのは、柏崎農学校卒業翌年の昭和十一年(一九三六)「脊椎カリエスで日本赤十字社新潟支部病院(現長岡赤十字病院)入院中」と筆者は生前に草玄氏から伺っている。「戦争中入隊する数年前に脊髄カリエスという断定の下にコルセットで数年苦しめられて居った時、手すさびに始めたことと共にそれが書というものに向けられる事になった原因であろうと思つている。」と昭和二十八年(一九五三)に『墨人』の中で語っており(註4)、書に興味を持ったのを同十一年の病氣入院頃からと、白寿展図録にも記したが、その後の調査の中で草玄旧蔵の競書雑誌や手紙類等の資料(以下「旧蔵」と略す)の中に、それ以前の出品券の切り抜きを新たに確認した(図2)。「書之研究」(註5)第十卷第九号(昭和八年九月十日発行)である。旧蔵中『書之研究』はバラバラになっていて、他一冊第十一卷第十一号(昭和九年十一月一日発行)が確認できるが、他は特定できない。この切り抜きから昭和八年(一九三三)草玄十三歳で筆を持っていたと推察できる。とすると柏崎農学校在学中には学び始めていたと考えられる。ただしこれは十三歳時でもあり、習字段階の域を出ず、入院中「手すさびに始めた」とあることから、まだ手習い期で、興味を持つという一歩進んだ段階ではなかったと思われる。『書之研究』の出品券が切り抜かれ筆を持っていたことには違いないが、実際に出品したかは不明なので、実際に確認できるものとして最も早い記録は白寿展で紹介した、旧蔵の同十三年(一九三八)、十八歳時の『健筆』(註6)第二卷第二号(図3)である。この競書誌中の随意部出品券が切り抜かれ、また、規定部の残券に「二回、新潟、柏崎町在橋場、江口久男」の記載があること(図4)から、前号第二卷第一号かそれ以前に一回目の提出があったことも窺え(註7)、

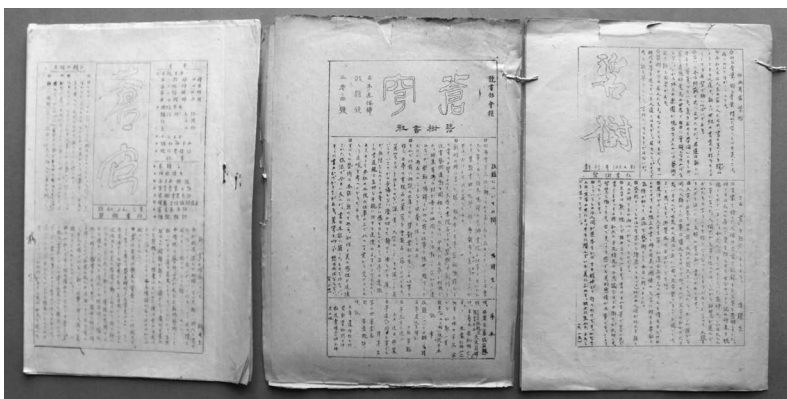


図1 右『碧樹』創刊号 昭和二十二年七月五日印刷
中『蒼穹』改題号 昭和二十二年三月三十一日印刷
左『蒼穹』最終号 昭和二十六年一月五日発行

(註1) 鈴木鳴鐸は、明治三十六年(一九〇三)五月一日、茨城県現土浦市出身。名は重文。始め不佞、後に芥舟堂、鳴鐸、鐸亭、鐸子と号し、時に南仙子、天野斜郎を用いた。自身の書院名を青郷書院とした。昭和四年(一九二九)、文檢に合格。比田井天来に師事し、同八年(一九三三)、天来門下による書道藝術社設立に参加、同十五年(一九四〇)の解散まで同人。戦後、書道芸術院に参加するが、同二十三年(一九四八)年退会。同二十六年(一九五三)十一月二十八日歿。

(註2) 『碧樹』・『蒼穹』は、茨城県新治郡瓦倉村(現石岡市)の鈴木鳴鐸主宰の競書部会報。ガリ版印刷の小冊子で写真掲載はなく、古典や手本、競書出品作は龍字で掲載していた。昭和二十一年(一九四六)七月五日印刷『碧樹』として鳴鐸の青郷書院発行で創刊され、翌年三月三十一日印刷の第二卷第四号で鳴鐸を含め三同人の一人田野石亭が急逝したため、石亭の書院名『蒼穹』に改題。発行所も碧樹書社と変更される。鳴鐸の急病により同二十六年(一九五三)一月号(二月五日発行)で中断、同年十一月二十八日他界し、そのまま終刊となった。

(註3) 以降、引用文中、改行は「」で示す。

(註4) 「自己紹介の頁、思い出すままに『墨人』第十五号 昭和二十八年(一九五三)七月一日発行 二十八頁。

(註5) 川谷尚亭主宰、大正十三年(一九二四)六月創刊。甲子書道会発行。

(註6) 比田井天来門下の上田桑鳩主宰、青葉書道院、昭和十二年(一九三七)三月、戦争のため休刊。

遅くとも同十三年一月(編集期間を考慮に入れば、前年十二月末)には、本格的に競書提出を始めていると見てよいだろう。また同年七月の『書勢』^(註8)への競書提出も行ったようである^(註9)。昭和八年時には手習いを始め、その後入院中に次第に興味を持ち、書の道に進んだというところであろうか。遅くとも同十三年からは間違いなく書に向かっていたと言える。『健筆』で確認できる提出状況とその成績は、表1のとおり^(註9)。

草玄旧蔵に、上田桑鳩の『健筆』を中心として、その師比田井天来の『書勢』、また桑鳩が主任の書道藝術社^(註10)の『書道藝術』などが残る^(註11)が、書道藝術社系の競書誌を選んだ理由を筆者は草玄氏に明確に聞き及ばず遺漏してしまった。しかし、戦後、桑鳩に師事していくことから、その制作主張に共鳴してのことと考えられる。小野寺啓治は「書道芸術社の人々」^(註12)の中で、『書道藝術』が「書雑誌発刊ブームの中では後期の部に属した刊行だが、雑誌の内容は最も注目すべきだ」とし、「まず、毎号同人が掲げた主張に、挑む書の創作を持ち寄り、同人間で自由かつ平等に批評を交じわし、新しい時代の書を果敢に試行した。第二は、書の宿命である古典の吸収と消化に、全員で取り組み、その実体を誌上に堂々と発表した。そして第三は、提唱と議論の全貌を誌上に明らかにして、書を志す者の意識の高揚と理解をうながした。これが『書道芸術』誌の最も偉大な仕事になった。」と、まとめているように、この新しさと書に対する意識の高さが、地方の柏崎に居た若い草玄の心を捉えたのではないかと考えられる。

一方、この昭和十三年(一九三八)十月までの間に落手したと考えられる森田子龍の草玄宛手紙が残る^(註13)。これには草玄の書に対する真剣さを感じ、そして才能を認めている内容と共に、「然し書は才ではありませんから油断は禁物なばかりでなく此の才を制御する為めに却て人一倍の努力を要する」とさへ言はれてゐます。油断禁物など兄には蛇足ですが小生との御交誼の初めに当つて聊か苦言を呈する次第です。」と記され、「御交誼の初めに当つて」というように、『健筆』の編集に携



図3 『健筆』第二巻第二号
昭和十三年二月一日発行

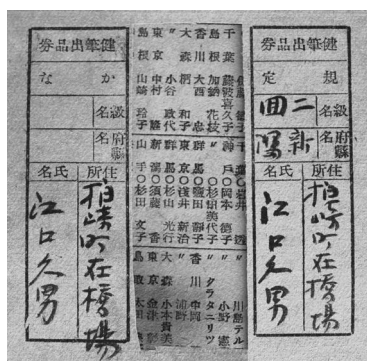


図4 『健筆』第二巻第二号
随意出品券切り抜きと残券

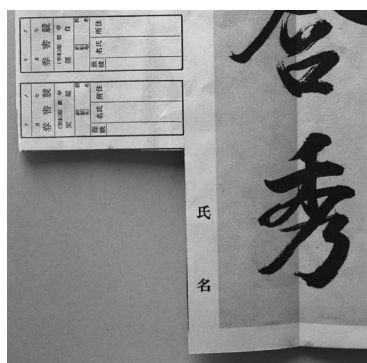


図5 『書勢』第二巻第七号
昭和十三年七月一日発行 出品券切り抜き

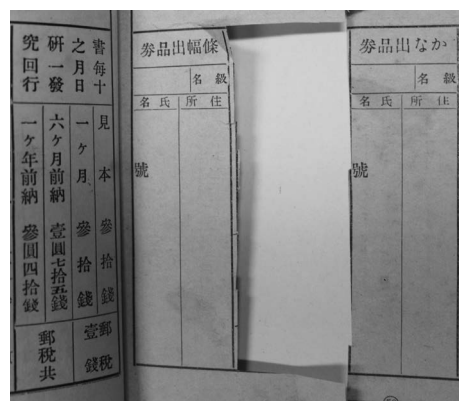


図2 『書之研究』第十巻第九号
昭和八年九月十日発行 出品券切り抜き

(註7)
図4のように、かな部にも初提出しようとしたのか、出品券の残券に「柏崎町在橋場 江口久男」と記入されている。

(註8)
比田井天来主宰、昭和十二年(一九二七)七月創刊。書学院発行。同十四年(一九三九)天来他界後、次男南谷が続ける。同十八年(一九四三)、戦争のため終刊。

(註9)
旧蔵資料中、草玄名の確認できる資料から作成。

(註10)
書の研究のため昭和八年(一九三三)、比田井天来門下の二十四人によつて結成され、上田桑鳩を主任として、「書の芸術的方面並びに実用的方面の研究」、「創作、臨書習作方面の研究」、「書の文化史的研究」、「鑑賞、批判方面の組織的研究」、「隠れたる実力ある人士の紹介並びに後進の誘掖」の五つを柱に書道雑誌『書道芸術』が編集発行された。昭和十五年(一九四〇)三月終刊。

(註11)
いずれも揃いではないが、他に戦前では雄山閣発行「書の友」、泰東書道院出版部発行「書道」が残る。

(註12)
『書道ジャーナル』季刊19 書道ジャーナル編集室 平成元年(一九八九)十一月十日発行 三十一―三十五頁。

(註13)
「御手紙有り難く拝見致しました。御熱心御真剣な御求道振りに打たれ励まされてゐます。まだ大変お若い由この年で此の筆、実によい才に恵まれてゐられる様です。然し書は才ではありませんから油断は禁物なばかりでなく此の才を制御する為めには却て人一倍の努力を要する」とさへ言はれてゐます。油断禁物など兄には蛇足ですが小生との御交誼の初めに当つて聊か苦言を呈する次第です。／小生など晩学でもあり書歴を浅くお恥しい次第ですが共に同じ道を求める同行を得ました事を喜んでゐます。何卒小生の方こそ宜敷願ひます。／御勉強は勿論古碑帖によられるのがよいと思ひます。貴兄程の腕があれば先輩の臨書手本も不要でせう。どし／＼自分で進まれてよいと思ひます。碑帖学習の順序ですが小生の経験を上上げて見ませう。／高貞碑三月／建中三月／雁塔聖教序／皇明皇后聖教論／風信帖／上の様なものです。三ヶ月宛と言ひましても当時小生は神戸にゐて殆んど勉強しませんでしたから一生懸命おやりになればそんなに日数をかける必要もないでせう。雁塔聖教を習ふ様になつた頃上京しましてその後半年は殆んど勉強出来ず雁塔は中心手本といふだけで孟法師などもちょい／＼やりました。／衆談論は二十日程一生懸命にやり大いに悟りました。之が出発となつて風信帖、三帖冊子、逸勢の順文などで眼界を広め大いに得る処がありました。その後は別に纏つた研究も出来ず今日に至つてゐます。／やはり先づ北魏高貞碑から入られるのがよいのではないかと

わっていた桑鳩門下の子龍との接点がここに始まったものと思われる。またこの後の同十三年十一月二十八日消印の子龍からの草玄宛手紙と併せて返送された草玄の戦前の学習期の書で唯一確認できる「開元九年」が残る(図6)。子龍の添削が付されており、指導も窺える。この「開元九年」は王羲之の興福寺断碑の臨書であることも判明する(図7)。そして同送の返信冒頭には「御手紙拝見、御清書格段の進歩あの大きな骨組みで進みなさい」と評が記されている(図8)。後年、墨人会を結成して行く仲間としての齒車がここに動き出していく。

表1 『健筆』(青葉書道院)

巻号	発行日	成績	提出状況および臨書古典
第二巻第二号	昭和十三年二月一日		随意出品券、清書添削券切り取りあり。 規定残券に「二回、新潟 柏崎町在橋場、江口久男」、かな残券に「柏崎町在橋場、江口久男」の記載あり。
第六巻第一号	昭和十七年一月一日		規定出品券切り取りあり。
第六巻第二号	昭和十七年二月一日		規定・随意出品券切り取りあり。
第六巻第三号	昭和十七年三月一日		規定・随意出品券、清書添削券切り取りあり。
第六巻第八号	昭和十七年八月一日	八級	随意出品券切り取りあり。 規定残券に「八級、神奈川、高座郡相模原町臨時東系第三陸軍病院西寮七号四江口久男」の記載あり。
第六巻第十号	昭和十七年十月一日	第五九回競書成績表 ・一般規定部八級 ・一般随意部八級六番	規定・随意出品券切り取りあり。
第六巻第十二号	昭和十七年十二月一日		規定・随意・条幅出品券切り取りあり。
第七巻第一号	昭和十八年一月一日	第六二回競書成績表 ・一般規定七級三番	規定・随意出品券切り取りあり
第七巻第二号	昭和十八年二月一日	六級	随意出品券切り取りあり。 規定残券に「六級、神奈川、高座郡相模原町臨時東系第三陸軍病院西七ノ四江口久男」の記載あり。

また、前掲の昭和十三年(一九三八)十月までの落手と考えられる子龍との交友の始まりが確認できる手紙には、「御勉強は勿論古碑帖によられるのがよいと思ひます。」と記され、その後、古典名が記されているが、「やはり先づ北魏高貞碑から入られるのがよいのではないかと思ひます。」と学習最初の古典は、高貞碑を勧められている。同年十一月八日消印の子龍からの手紙(註13)は、草玄から依頼されたのだろう「高貞碑は今の処よい印刷なく、書道藝術の一、二月号に出てゐるものばかりよく、又字数もあれだけ習へば十分。あれによつてお習ひ下さい。」と、『書道藝術』の掲載のものを勧められつつ、また前掲十一月二十八日消印の手紙でも「高貞碑心掛けておきます」とあり、その後見つかったのであろうか、翌年三月二十九日付(同消印)の手紙からは「何時かの高貞碑遂にお返しせずにしまひましたがあれば朱を入れる余地ありません。葉書で

思ひます。各帖のもつ夫々のよそやはり習つてゐる中に追々解つて来るものです。お習ひになつたものは及ばずながら小生拝見して共に進ませう。法帖類御入手が御面倒なればお取次も致しませう。何卒御遠慮なく御申越下さい。／まだ意を尽さないのですが又後便で近々申上げませう。／何卒御清書とし／お見せ下さい。寒さに向ふ折柄御自愛の程お折り申上げます。／ 朱筆で大変失礼致しました。」

(註14)
「過日は御手紙有難く拝見。御熱心に深く感銘してゐます。早速御返事差上ぐべき筈の処同人展にて寸暇なく、同時に書道藝術の編輯にて今日まで延引致しました。高貞碑は今の処よい印刷なく、書道藝術の一、二月号に出てゐるものばかりよく、又字数もあれだけ做へば十分。あれによつてお習ひ下さい。」

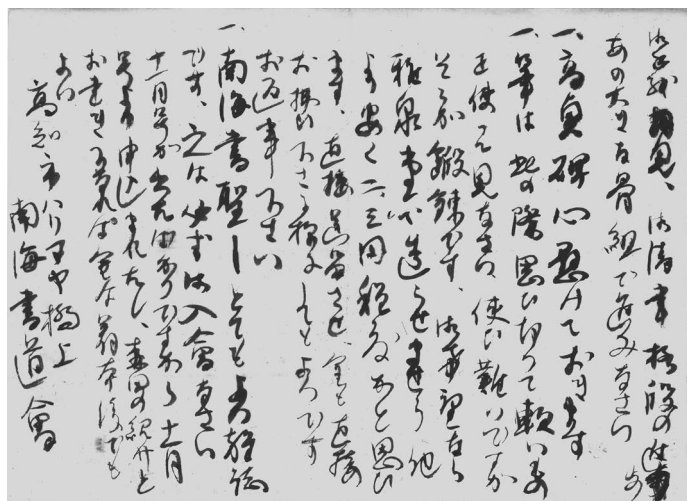
図6 臨興福寺断碑(開元九年)付森田子龍添削



図7 王羲之・興福寺断碑(部分)



図8 昭和十三年十一月二十八日消印 草玄宛森田子龍手紙



申上げたよう外にありません。」と高貞碑にこだわって学び、進展していることが窺える^(註15)。しかし、同手紙に「ドシ／＼お習ひになつて書道藝術の競書にもお出しになつては如何ですか。」とあるように、この時点では、通信添削を受けているが、『書道藝術』の競書部門には提出していなかったことが判る。

一方、前掲十一月二十八日消印手紙には、「一、筆は此の際思ひ切つて軟いものを使って見なさい。使ひ難いですがそこが鍛練です。御希望なら雅泉堂で造らせませう。他より安く二、三円程度かと思ひます。直接送品させ、金も直接お払い下さる様にしてもよいです。お返事下さい。／＼、南海書聖」とてもよい雑誌です。之は必ず御入会なさい／＼十一月号出たばかりですから十一月号より申込まれたし。森田の紹介とお書きになれば金は着本後でもよい／＼高知市ハリマヤ橋上／南海書道会」と書かれてあるものの、草玄が南海書道会に入会した記録は旧蔵には確認できず、『南海書聖』^(註16)、それ以外に戦前では、『書道藝術』、『書の友』^(註17)、泰東書道院発行『書道』^(註18)の購読も旧蔵から確認できるが、これらの競書への提出の確認はできない。これら残された書道雑誌から草玄の指向はまだ特定の団体には固まっておらず、多様な流派の中から学ばうとしているものの、書道藝術社系への関心が向いていたと思われる。そしてこの時期、学書としての臨書をしていた古典は、王羲之興福寺断碑や前掲した子龍の手紙から高貞碑が見られる。

そうしたところ、日中戦争により昭和十五年(一九四〇)十二月に入営し、筆を一時置かざるを得なくなるが、年明け間も

(註15)

「とんと御無沙汰申上げてゐます。その後如何お過ごしですか。何時かの高貞碑遂にお返しせずにはしまひましたがあれは朱を入れる余地もありません。葉書で申上げたよう外にありません。ドシ／＼お習ひになつて書道藝術の競書にもお出しになつては如何ですか。そして時々お見せ下さい。条幅一葉同封します。随分変なものになりましたが一寸苦心したものです。御好評下さい。／＼清拝／三月二十九日／江口様」

(註16)

比田井天来門下の手島右卿主宰、南海書道会(昭和八年発足)発行。

(註17)

昭和十年(一九三五)五月創刊。雄山閣発行。同十九年(一九四四)一月「時局の要請に応じて統合し新発足致す」とに相成りました。新雑誌は専門誌「書苑」及び一般誌「書道日本」の二種であります。」と、統合終刊となった。

(註18)

昭和七年(一九三二)一月創刊。同十九年三月終刊。泰東書道院出版部発行。

なく戦地で、左腕を貫通し左腹部を掠めた銃創を負い、同年六月末には広島に内地送還されていることが確認できる^(註19)。負傷療養しながらも、書への思いは変わらなかったことは、その当時の写真^(註20)や手紙からも確認できる。子龍から送られた同十七年(一九四二)五月二日消印の手紙では、「御負傷との事いかにですか。書の道にお互やつて行きませう。」と、負傷への見舞いと書の制作へ戻ることに誘われている。そして同年九月二十一日消印手紙では「手堅い、殆んど破綻を見せない骨組みと適度の大きさとでよくまとまり、安心して見られます。この碑をこの様に自分を制御しつゝ、臨書することは難しい事です。聊か重い筆を残してゐますがよく利いた線の方が多いです。この碑の臨で陥りやすい突き当つた筆も、さうでない筆より少いです。今少しの潤ひと暢びが欲しいです。これは紙背に蓄へる力の大なることが根本ですからオイソレとは行かない事です……。尚まとめるために余りに控へ目にして伸びる力をつむ様なことがあつてはいけません。」と、五月二日消印の手紙に記された子龍の誘いのように、書の制作へ戻り、子龍の指導を受けていることが確認できる。文中の「この碑」とは何を指すか不明だが、戦時下ではあったものの、その後も筆を置かず、旧蔵の子龍との手紙からは、神龍半印本蘭亭叙、雁塔聖教序、樂毅論、伊都内親王願文、枯樹賦、久隔帖の名が認められる。

また、昭和十八年(一九四三)以降となると書道雑誌類も戦争による休刊、終刊となり、競書誌での確認はできないものの、戦中に書学を続けていたことは同十九年(一九四四)十二月二十五日付子龍からの草玄宛手紙^(註20)から確認でき、継続していたことがわかる。「御覚悟の程も窺はれて大変嬉しく存じました。共に手を携へて進ませう。(中略)他人行儀は抜きにしてお互に一つになつてやつて行きませう。御作もどしどしお見せ頂きたいと存じます。小生も機会ある毎に送つて御意見も承りたいと思つて居ります。新しい筆で高貞碑をお書きになつたもの早く拝見したいですね。」と文面から、厳しい時代ながら草玄の書に向かう覚悟も窺え知れる。この他にも戦中期に子龍との手紙の交換は、確認できるが、戦前・戦中期は、まだ師弟関係を持った師事というものを草玄は結んでおらず、特定の流派・団体とは距離を置いていたと見て良いだろう。

戦争終結後もしばらくは独学であつた。戦前からの子龍との交流は、戦後早くからも継続され、昭和二十一年から二十二年の二月十九日消印手紙に「(以上略)終戦後何か事業お始めの由お身体を気をつけられながら御奮闘を祈上ます。／本日一寸鄭審則を習つて見ました。数枚御覧に入れます。小生の塾で競書を募集してゐます。塾生の刺激になる様何か一枚お送り下さい。随意の外に同封の四字(印刷)が規定です。二十四日メ切にしてゐますがお送り下さいませんか。(以下略)」とあることから、草玄が筆を持っていた可能性が確認できる。しかし、上田桑鳩の研精会(主幹森田子龍)『書之美』に同二十三年



図9 昭和十七年(一九四二)頃陸軍病院療養時。左腕負傷で覆われている。書いている漢詩は、西郷南洲詩偶成。

(註19) 草玄は、昭和十五年(一九四〇)十二月に入隊するが、すぐに銃創を負い、同十六年(一九四一)六月末には内地送還され、広島宇品港から上陸し広島陸軍病院第一分院に入院しており、その後、静岡県田方郡伊東町・臨時東京第一陸軍病院伊東臨時輻地療養所第三分室・東京市牛込区戸山町・臨時東京第一陸軍病院第八外科第二号室・神奈川県高座郡相模原町・東京第三陸軍病院西寮七号舎に転院している。昭和十八年(一九四三)春には、退院し、刈羽の実家に戻っている。

(註20)

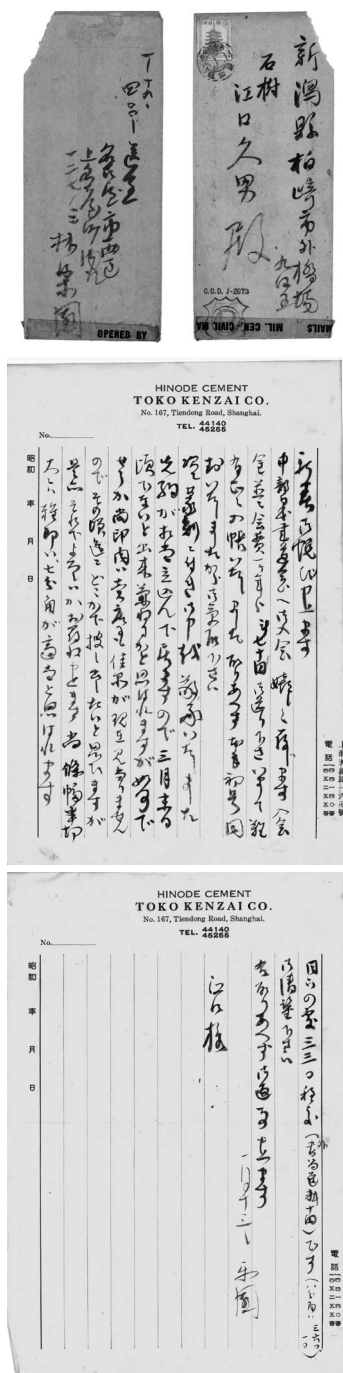
「過日は御手紙有り難う御座いました。御覚悟の程も窺はれて大変嬉しく存じました。共に手を携へて進ませう。御手紙を見て何時も思ふ事なのですが、大兄の御手紙の御書き振りを小生の先輩などに書すそれと実によく似てゐるのです。実に小生の言ひさうな事です。それだけ小生の心に響くものも強く何時も打たれるのですが……。又かう考へて来ると何だか他人ではない様な、かう申しては失礼ですが自分の弟の様な気がして来るのです。今後は御恩だの感謝だのと他人行儀は抜きにしてお互に一つになつてやつて行きませう。御作もどしどし御見せ頂きたいと存じます。小生も機会ある毎に送つて御意見も承りたいと思つて居ります。新しい筆で高貞碑をお書きになつたもの早く拝見したいですね。文部大臣賞の御祝詞有り難う御座いました。然し大臣賞を貰つたとして上手になる訳ではなし自分では問題にしてゐません。銀製の花瓶だけは貧しい六畳の間に侘体ない位で恐縮してゐますが……。御地は雪が多いでせうね。今年はまだですか。小生も郷里は山陰の但馬、雪の子です。寒さの折柄益々御自愛。御奮闘を祈ります。では御多幸の新年をお迎へ下さい。／十二月二十五日／清拝／江口大兄」

(一九四八)四月の創刊号から提出しているが、桑鳩に師事するのは、翌二十四年(一九四九)三月三日(註21)からであり、それまでは購読して競書は提出しているものの独学していた。それ以前の同二十一年(一九四六)に創刊された鈴木鳴鐸の『碧樹』『蒼穹』に、同二十三年五月五日発行、第三巻第五号から競書成績に名を確認できるが、これは次章以降に後述する。また、『書的美』に少し遅れ、同二十三年五月に大沢雅休の平原社『書原』(註22)も購読をはじめ、雅休の指導を受けることも探っていたようだが(註23)、『書原』の競書には名を確認できない。桑鳩と同門の雅休であったが、草玄は、師としては選択しなかった。ただし、『書原』の購読は、同二十七年(一九五二)七月発行第四十四号まで旧蔵に確認できるものの、何故、『書原』に提出せず、雅休の平原社の指導を中核としなかったか、これも筆者は草玄氏に確認し得なかったが、その理由の一因は、鳴鐸の助言によるところもあったと考えられる。『平原社一派の原稿字バリのかなは私の考では書的鍛練を無視した行き方で賛成ハ出来ませんが、走筆と用筆の素朴さから来る自然さを感じませんでしたか。あ、いふところに見られるところがあることを考慮に入れて下さい。』(註24)と鳴鐸に助言をもらい、草玄の考える書の方角とは、違っていたために、雅休に就かなかったのだろう。しかし、雅休の自然な用筆に目を留めることもあり、また版画家棟方志功と雅休との交友から『書原』に棟方が頻繁に取り上げられていたことも、戦後柏崎で交友のあった草玄として気に留まる場所でもあった。既成の書壇と訣別し墨人会を同二十七年(一九五二)一月に立ち上げ、同年四月に機関誌『墨人』を創刊しながらも、『書原』の同年七月号を旧蔵中に確認できることは、交友のことや、棟方の作品制作に没頭する姿勢やその熱気に刺激され、書に何か持ち込めないかと考えてのことでもあって、購読が続いたと考えても良いのではないだろうか(註25)。

他一つ、これまで指摘されていなかった点を挙げておく。昭和二十三年(一九四八)一月十三日付(十四日消印)手紙で、中部日本書道会に入会していることを確認できる。手紙には、入会、入金受領の御礼、そして同年初号の同送の旨、篆刻の依頼があったが三月末頃になる旨等が記されている(註26)。中部日本書道会との手紙や雑誌類の記録はこれ以上確認できず、後年の作品や資料からも影響を推し量ることはできないことから、これは雑誌購読と独学の手本、参考書とした程度だったのではないかと思われる(図10)が確認には至らない。

図10 中部日本書道会手紙

同封手紙便箋二枚



(註21) 桑鳩の草玄宛昭和二十四年三月三日消印手紙で入門を了承。「御手紙拝見何だか無理に入門した様になって面映い気持ちがありますが御希望なれば御相談相手二なりませう。兎二角君ハ筆方があるのですから自重して大物になって貰ひたいものです。期待して居ります。小生も大い二力を入れます。教授規定は別紙の通りです。又時々法帖なども出ますし中二ハ一般二出ないもので芸術的の面白ものなどもありますがそういった時二ハ御届したいと思つて居ります。兎二角今之中二身を入れて勉強して下さい。三月三日 上田生/江口様(以下規定略)」

(註22) 平原社発行から昭和二十三年(一九四八)四月(九月一日発行、未確認)または、五号(十月一日発行)で書原社発行に変更。

(註23) 昭和二十三年(一九四八)五月二十七日付、草玄宛雅休手紙。「江口様/大沢生/拝啓御たづねの件、一般的にはすぐれた古典ならば何でもよいといふことになりまふ。その鑑賞に徹してその技法に理解がつけば正しい学書となると思ふのであります。但し、何を次に習ふべきかといふことはその人々によつて一定せずともよいわけですが、誰にでも師事して添削を数回受ければその特長と欠陥とはがはっきりとわかると思ひます。私は指導を惜むわけではありませんが、他の指導者とは異つたシステムを持ち又方法をもつが為に、それは多少特別なので、よくよく縁あつて私について本格的に習ふ人へのみ強い、他の方には、その人の作品と、その人の師の方針と齟齬して迷はせることがありますので、わづかいと思ひますから雑誌でもごらんになつてから私の方針がわかれれば一層ふかいつなかりを共に研究することになるかと思ひます。この点もお考へ下さい。雑誌購読ならどんな立場でもよいが、その人に師事となると、一生の運命に關することですからよくお考へなつてこの人ならと思はれる方を選んで慕進されたいと思ひます。只君の書風からすれば弘法大師が顔真卿を深くせられたらもつと豊饒な書性となるのかと思ひますが如何。雑誌は六月初めに出版す。」

(註24) 昭和二十四年(一九四九)二月十三日(十五日消印)草玄宛鳴鐸手紙。「以上略。○十日上海雲南院見學、貴君御出品の灌頂記臨を拝見して來ました。貴君も或は御上京でしたらうか。あ、して見ると、君自身の陶酔に終つてゐる気がしなかつたですか。字々の構成や線には面白いものがあるが、儼に残像として残るもの、偉大さが思はれません。今一応の御考慮を折つて居ります。平原社一派の原稿字バリのかなは私の考では書的鍛練を無視した行き方で賛成ハ出来ませんが、走筆と用筆の素朴さから来る自然さを感じませんでしたが、あ、いふところに見られるところがあることを考慮に入れて下さい。いすれにしても一般に地道な行き方をせず、「新しさ」といふ怪物のみをたづねて彷徨してゐると思ひませんでしたか。(以下略)」

なお、草玄の書学の中心となる『書之美』での学習については、新知見がないので、『書之美』での成績、学習した古典は表2をもって代える。『書之美』では着実に頭角を現し、毎月上位の成績を収め、昭和二十四年（一九四九）三月三日桑鳩に師事した同月下旬二十七日から二十九日までの研精会幹部養成講習会に参加し（註27）、同会の中でも地歩を固めていつている。また同時期には、日本総合書展（毎日展）、書道芸術院展、書之美展、日本美術展覧会（日展）と、戦後始まる総合書展等で受賞を重ねている。

表2 『書之美』（研精会）

巻号	発行日	成績	提出状況および臨書古典
創刊号	昭和二十三年四月一日	第一回競書成績 一般規定部二級先頭 一般随意部三級六番（昇級）	規定部「玉雪開花」
第二号	昭和二十三年五月一日	第二回競書成績 一般規定部二級先頭 一般随意部二級九番	規定部「寄心清尚」
第三号	昭和二十三年六月一日	第三回競書成績 一般規定部一級先頭（賞受） 一般随意部二級三番（昇級）	規定部「春和景明」 ※上田桑鳩の「審査概評」には、「虚和閑雅な姿として、枯強い情懷を表現してゐる。臨孟法師碑をこのやうに解釈したことにも敬服する。」とあるが、規定は四字漢字で孟法師碑とはされていない。随意部の誤りか。
第四号	昭和二十三年七月一日	第四回競書成績 一般規定部一級三番 一般随意部一級二番	規定部「雲聳奇峯」
第五号	昭和二十三年八月一日	第五回競書成績 一般規定部一級二番 一般随意部一級三番	規定部「節勁古松」
第六号	昭和二十三年九月一日	第六回競書成績 一般規定部一級先頭（賞受） 一般随意部一級（賞受賞）	規定部「心安閑放」 随意部「宣之度量」
第七号	昭和二十三年十月一日	第七回競書成績 一般随意部一級四番	
第九号	昭和二十三年十二月一日	第九回競書成績 随意部準会友先頭	随意部・臨瀧頂記
第十号	昭和二十四年一月一日	第一回推薦試験・準会友同人習作・準会友	準会友習作・臨瀧頂記
第十四号	昭和二十四年五月一日		幹部養成講習作品「丘園散帛」
第十六号	昭和二十四年七月一日	同人習作・準会友	準会友習作・臨張猛龍碑

（註25）
雅休は、版画家棟方志功と共作をするほど交友を深め、「書原」で昭和二十四年（一九四九）七月号以降、作品紹介や記事掲載している。雅休の棟方との出会いは、同二十四年六月四日、駒場の日本民芸館（定本 大澤雅休 大澤竹胎の書による）とあり、「書原」の掲載開始と一致する。棟方は青森から上京後の最初の支援者が新潟の島丈夫であり、その縁で昭和六年（一九三）新潟に遊び、翌七年、現新潟市江南区亀田の〈長谷川邸の庭〉を制作し、第七回国画会展で国画会奨励賞を受賞している。戦後、同二十一年（一九四六）七月、柏崎の桑山太市を訪ねたりして、柏崎の人々と交友があった。草玄とも交友があり、「ああいいう熱気というのは、やっぱり、俺もと思うもの。」「書くところの、そういう熱気がある。本当の熱気がある。あつて、こいつにはやっぱり参つたです。」という言を平成八年（一九九六）三月十六日に筆者は何つてゐる。旧蔵の中で棟方からの最古の手紙が、昭和二十七年（一九五二）二月十一日消印の墨人会結成への祝いが書かれている。墨人会御組織よき書芸の上に更に一段の真上を重ね行きます事のお心底をよろこびに堪いませぬ。どの行経はともかくとしまして、その道々に真実ある事のよろこびと恐れをよろこび廻ります。／今日も、これから書原社の人達に話をに行くところです。新しい方法だけで新しきと思ふ程馬鹿の事はないと存じます。根元の在どころが、すべての書命をつかさどる所、その根元たる、その書くにあると存じます。書くといふ事は、文字とはまた別だと存じます。生命するといふところから書在なりと信ずる故の貴さ畏れを念執したいばかりと存じます。」

（註26）
昭和二十三年（一九四八）一月十三日付（十四日消印） 草玄宛 宛林楽園手紙。「新春御喜び申上ます。／中部日本書道会へ御入会嬉しく存じます。入会金並二会費一ヶ年分計七十円御送り下さいまして難有正二入帖いたしました。取りあへず本年初号同封いたしましたから御受取下さい。／次二篆刻二付き御申越敬承いたしました先約が相当立込んで居ますので三月末日頃でないと出来兼ねるかと思はれますが如何でせうか。尚印肉ハ売店にも佳品が現在見当りませんのでその頃迄どこかで捜し出したと思ひますが、是亦それでよろしいかお尋ね申上ます。尚条幅半切大ニハ雅印ハ、七分角が適当と思はれます。／目下の処三三〇程度（外書為送料十円）で御清鑑下さい。／右取りあへず御返事申上ます。／一月十三日／江口様」

（註27）
兵庫県城崎郡豊岡町（現豊岡市）糸勝楼で開かれ、桑鳩、子龍、宇野雪村、平川朴山、河田一丘が講師となり、他会員四十九名が参加した。

第十七号	昭和二十四年八月一日	同人習作・準会友	準会友創作・臨本簡
第十八号	昭和二十四年九月一日	同人習作・準会友	毎日展推薦賞(八月)、研精会会友・臨李柏文書／準会友習作・臨治河議集
第十九号	昭和二十四年十月一日	同人習作・会友	
第二十号	昭和二十四年十一月一日	同人習作・会友	会友習作・臨請来目録
第二十二号	昭和二十五年一月一日	同人習作・会友	会友習作・臨平復帖
第二十四号	昭和二十五年三月一日		第三回書道芸術院展特選(二月)、研精会二部会員
第二十七号	昭和二十五年七月一日	同人・二部習作	書の美第一回展推薦賞(五月)／二部習作・臨三十帖冊子(橘逸勢部分)
第三十号	昭和二十五年十月一日	同人・二部課題習作／二部随意習作	二部課題習作・臨自叙帖
第三十五号	昭和二十六年三月一日	同人・二部課題習作	第四回書道芸術院展推薦・読売新聞賞(二月)、一部会員
第三十六号	昭和二十六年四月一日	同人・一部課題習作／一部随意習作	
第三十七号	昭和二十六年五月一日	同人・一部課題習作／一部随意習作	課題習作・臨李柏文書／随意習作「安城東錦」
第三十八号	昭和二十六年六月一日	同人・一部随意習作	
第三十九号	昭和二十六年八月一日	同人・一部随意習作	第二回書の美巡回展／随意習作・臨離洛帖
第四十号	昭和二十六年九月一日	同人・一部課題習作／一部随意習作	課題習作・臨寸松庵色紙／随意習作・臨急就帖
第四十四号	昭和二十七年一月一日	同人・一部課題習作／一部随意習作	課題習作・臨佐理書／随意習作・臨雁塔聖教序
第四十五号	昭和二十七年二月一日	同人・一部課題習作／一部随意習作	課題習作・臨石鼓文
第四十六号	昭和二十七年三月一日	同人・一部課題習作／一部随意習作	課題習作・臨良寛書／随意習作・臨黄庭内景経

二、草玄と鈴木鳴鐸、そして『碧樹』『蒼穹』について

「鈴木鳴鐸の名前を知ったのは、書道芸術社の『書道芸術』によってである。他の同人に比べて、誌上での華々しい活躍の人ではなかった。作品にしても寡作であったようである。」^(註28)とあることから、草玄が鳴鐸の名を知るのは、前述の戦前期に『書道芸術』を購読し始めたことによって、その名を知ったようである。しかし戦前期に鳴鐸との接点は、確認できない。

(註28)
江口草玄「鈴木鳴鐸氏のこと」『山階通信』昭和六十三年(一九八八)十一月発行 一頁。

後に師事したのが上田桑鳩だとしても、特定の流派に肩入れせず、複数の競書雑誌を購読して学習していた中で、戦後、鳴鐸も選んだ理由も特定できない。ただし、「これ見よがしの胸張った臨書でなくて、わが目とおのが手にだけつぶやく、つましやかと思える臨書態度をそこに見る」^{〔註29〕}と『山階通信』の中で振り返っているが、その臨書態度に草玄は感じ、鳴鐸の指導を選択の一つとしたのではないかと推察される。

その鳴鐸の『碧樹』を購読し始めるのが「昭和二十一年七月の『碧樹』創刊の数ヶ月後には入会していたはず」^{〔註30〕}とある。草玄の言に従えば同年秋以降、引っぱっても翌春を迎えるまでと考えられる。しかし、『碧樹』発行の八ヶ月間、草玄の名が競書成績欄への掲載はなく、草玄名が掲載されるのは、創刊一年十ヶ月後、『蒼穹』改題後の同二十三年（一九四八）五月五日発行^{〔註31〕}第三巻第五号に半紙規定部、随意部ともに六級からである。競書に七級以下の段位が掲載されていないことから、六級が競書部の最低位と推察される。とすると草玄の『蒼穹』の競書提出は、このころから間違いのないと言える。『碧樹』創刊の数ヶ月後には入会していたはず」としているが、同二十三年早くとしても一年半ほど経っており、草玄の記憶との齟齬が生じる。だがここで旧蔵の鳴鐸書簡の古いものに次の二点がある。

①昭和二十二年（一九四七）と思われる朱筆の草玄宛鳴鐸手紙（図11・註32）

②不明瞭な消印（□4・8）とG H Qの検閲印が押されている草玄宛鳴鐸手紙（図12・註33）

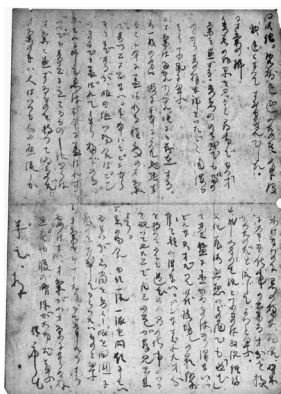


図11 ①

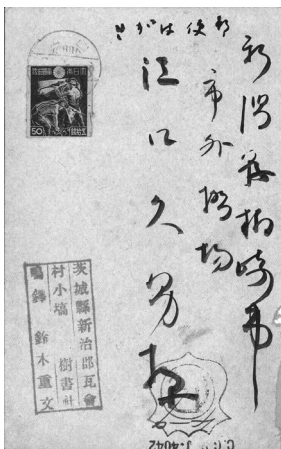
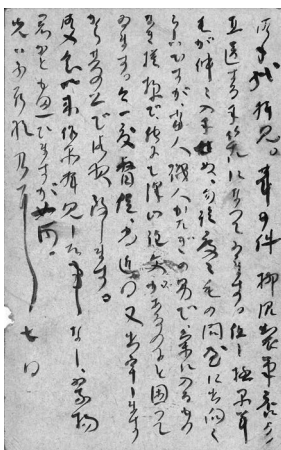


図12 ②（表）



②（裏）

①手紙の文頭が「○御佐。碧樹遅延のために其方に没頭遅くなつてすみませんでした。」で始まっており、『碧樹』は昭和二十二年（一九四七）三月三十一日印刷、第二巻第四号で『蒼穹』に改題しているため、この手紙は『碧樹』名を使っていることから、同二十二年三月以前のものである。このことから草玄の記憶どおり、同二十二年が明ける前後から『碧樹』の購読が始まっていたと考えられる。また、②の葉書に「御入会以来作品拝見した事なし」と記載があり、入会後も競書に提出していなかったことがわかる。②の葉書が大日本帝国郵便の炭鉱夫図柄の五十銭切手（第三次昭和切手）が貼付されていることから、葉書の切手料金が五十銭になるのが、同二十二年四月一日であり、その後、同二十三年七月十日に新郵便法で葉書の切手代が二円になることから、この間の葉書であることがわかる。そこから②の葉書は、同二十二年か三年の四月七日付（八日消印）葉書と考えられ、前述のように、同二十二年三月三十一日印刷の第二巻第四号で『碧樹』は『蒼穹』に改題されていることから、草玄は、『碧樹』を購読し入会はしていたが、競書には提出せずにおり、②の葉書以降、実際の鳴鐸の指導を受けて

〔註29〕 一頁。
註28に同じ。

〔註30〕 江口草玄「鈴木鳴鐸に思う」『山階通信』平成元年（一九八九）九月発行 一頁。加筆修正したものが『墨』第九十四号（平成四年二月一日発行）に「鈴木鳴鐸に思う」と題して図版と共に掲載されている。

〔註31〕 『碧樹』に発行日の記載はなく、印刷日のみ記載されている。『蒼穹』改題後、第三巻第一号（昭和二十二年一月一日発行）から発行日が記載される。

〔註32〕 「○御佐。碧樹遅延のため其方に没頭遅くなつてすみませんでした。／○才気の弁／1. 貴者の作品を見ると尋常でない「才気」を感じる。貴者の御手紙でも他□の方から其の様な評をいたゞく由僕もさういふ風に思ふ／2. 才気は多かれ少かれ、誰にも存在する。別一般の方ハ仮に手本によつて勉強すると手本に蓋はれる程度の才気であり其の上に出来ない。手本にもピンからキリまであるが、眼の低い場合はピンものにも蓋はれしまゞ様である。／3. それに比して君は手本に蓋はれずいつても其の上に立てるもの。他人からは才気と感ずるものを持つてゐるのだ。才気のない人はいつも人の垂流しか歩けないのに君の様な場合、将来に大きな仕事の出来る才を授かつたのだと信じてよいと思ふ。／4. 然し人間の生活といふものは政治経済文化芸術思想のどの面でも過去を基盤に置かぬものはあり得ない。どんな天才だつて時代環境の影響を離れ得ない。ドンなすぐれた才を持つてゐても過去の人間の仕事のワケを覗いて見た上で、自己の道が発見出来よう。／5. 君の場合、勿論一流一派を問題にしてゐるまいが、志尚を高くし眼を四開に放つて大成してもらいたいと思ふ。／6. 才気をケナしたり、もてあましたりする要はない。才気が小才気にならぬ様思想や腹の修練が大切だと思ふ。／鐸亭生／草玄様」

〔註33〕 「御手紙拝見。筆の件 柳沼製筆店より直送する手筈になつてゐます。但し極品筆毛が伸々入手せぬ、勿論度々毛の間屋に出向くらしいですが、当人職人かたきの男で、気に入るものなき模様で、他にも沢山注文があるのにと困つてゐます。今一度督促、尚近日又出字しますから其の上で御願致します。御入会以来作品拝見した事なし、翠揚君かとも思ひますが如何。／先ハ不取敢右耳 七日」

いたと考えられる。とすると、②葉書が同二十二年四月であれば、そこから『蒼穹』第三巻第五号の競書に名が掲載されるまで鳴鐸の「御入会依頼作品拝見した事なし」の葉書を受け取りながら約一年何をしていたかという空白期(図13中④)が生まれる。

また一方、同二十三年四月のものであれば、この葉書に「御入会以来作品拝見した事なし」と書かれてきたことで、『蒼穹』の競書に提出し、同五月五日発行の第三巻第五号に六級で掲載されたとする動向と合致する。しかし、一年半の間未提出で同二十三年四月七日付の手紙に尻を叩かれ、制作してすぐに競書提出し、五月一日印刷で、五日発行の『蒼穹』第三巻第五号に間に合うかという疑問が残る。草玄の「昭和二十一年七月の『碧樹』創刊の数ヶ月後には入会していたはず」と言う記憶から、やはり途中で②葉書を受け取りながら一年半も入会後提出せず何をしていたか空白期が生じ(図13中④)、草玄が鳴鐸の指導を受けるのが『碧樹』期からでなく、『蒼穹』に改題後という齟齬が生まれる。この空白期、齟齬を埋める証左は現在見いだせないが、『碧樹』『蒼穹』を購読し入会はしていたが、競書にはしばらく提出せず、その後、鳴鐸の②葉書の「御入会以来作品拝見した事なし」という指導から、同二十三年春、『蒼穹』に提出を始めて、第三巻第五号の六級に草玄の名が初掲載となったという流れは考えて良いと思われる。(図13)

図13

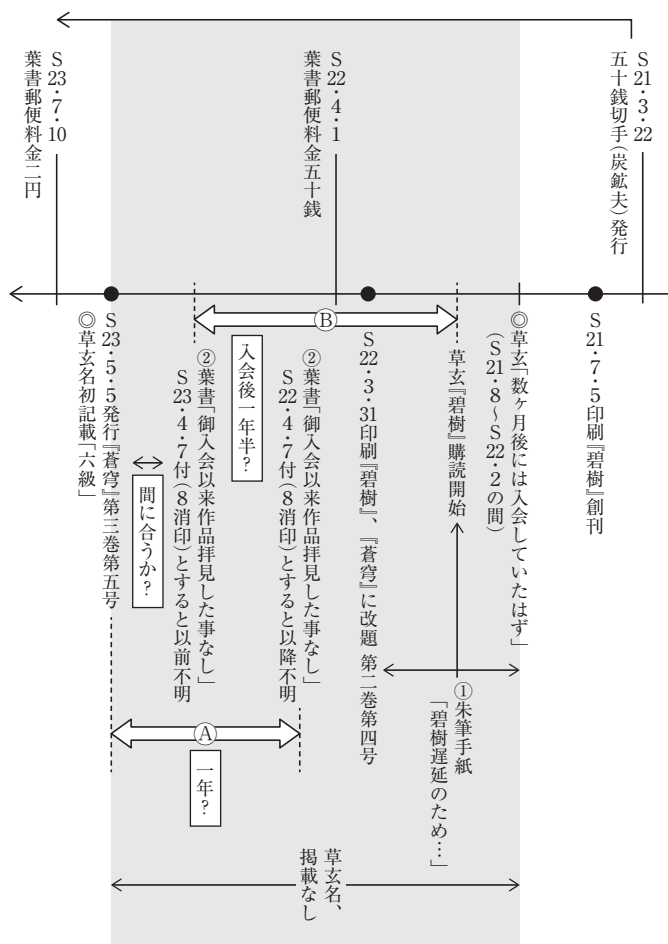


図14 《臨李柏文書》 昭和二十四年



昭和二十三年（一九四八）の第三巻第五号の提出を皮切りに順風に昇級を進め、翌年（一九四九）一月には社友、そして、同年九月には同人への打診を受けている（註34）。単に碧樹書社が茨城県柿岡の小団体で、昇級が容易な団体であったとは思にくい。戦前の書道藝術社に参加し、その同人達と切磋琢磨し、また、戦後も書道芸術院に参加しながらも同二十三年に、その書道芸術院をも脱退していく鳴鐸の批判的姿勢や、その制作態度からも考えにくい。草玄の競書成績への鳴鐸の評価は妥当であろう。前掲①の朱筆の手紙に「才気の弁／貴着の作品を見ると尋常でない「才気」を感じる。（中略）君は手本に蓋はれずいつでも其の上に立てるもの―他からは才気と感ずるものを持つてゐるのだ。（中略）5. 君の場合、勿論一流一派を問題にしてハるまいが、志尚を高くし眼を四圍に放つて大成しても、らいいたいものと思ふ」と競書提出以前の鳴鐸の草玄作品への評価を示すもので、草玄が特定の師匠の手を真似るだけの者でなく、自分の目で見ていける者として見ており、とすれば鳴鐸は若き草玄を評価していたことは間違いない。

ところで、草玄は鳴鐸との面晤の記憶を「遺憾にして面晤もまた、後にも先にも一回だけであった。昭和二十三年か昭和二十四年ころのことであつたらうか。佐渡の中村木子と二人して、たぶん茨城県の柿岡町だったと思うが。ご自宅に伺った。どのような話題であつたか、飲んで飲んで、飲み合った記憶しかないのだが、鈴木鳴鐸四十五歳ころのこと。中村木子が三十歳を過ぎたばかりで、わたしが二十九歳か三十歳。敗戦を契機として、わたしも中村木子もお互いに、己れの書の道のことを新しく活性化せざんばと意気込んでいた最中のお会いであつたのだ。」（註35）と記している。これは昭和二十五年（一九五〇）十一月十一日消印の鳴鐸手紙（註36）から十一月上旬に中村木子と二人で柿岡の鳴鐸宅を尋ねたことを指すと思われるが、鳴鐸と面晤したのが、この一回だけでなく、それ以前に草玄は、鳴鐸に面晤している事実は確認できる。同二十四年（一九四九）八月十五日に第二回日本総合書芸展（毎日展）で東京都美術館において、やはり中村木子と上京して初対面し、草玄がこの時、第一部に李柏文書の臨書（圖14）を出品し推薦賞を受賞したことを、鳴鐸に喜ばれたことが確認できる（註37）。この時は短時間であつたようで、前掲の同二十四年九月三日消印の手紙からも裏付けられる。また、『山階通信』（平成元年三月発行）「碧樹風信帖」の中にも、草玄自身が書き出しており（註38）、鳴鐸と直接顔を合わせたことが確定できるのは、都合二回である。

こうした鳴鐸との関係の仲で草玄の『蒼穹』への競書提出と成績は、表3のとおり。

表3 『蒼穹』（碧樹書社）

巻号	発行日	成績	提出状況および臨書古典
第三巻第五号	昭和二十三年五月五日	半紙規定部六級先頭 半紙随意部六級先頭（優下）	半紙規定「春來萬里客」 半紙随意部 臨智永草書千字文
第三巻第六号	昭和二十三年六月一日	規定の部五級先頭 随意の部五級先頭（優下）	半紙規定「乱定幾年回」 半紙随意部・臨樂毅論
第三巻第七号	昭和二十三年七月五日	規定之部四級先頭 随意の部四級先頭	半紙規定「陽断江城鷹」 随意・大字四字
第三巻第八号	昭和二十三年八月五日	随意（半紙）三級先頭	随意（半紙）・臨張猛龍碑

（註34）昭和二十四年（一九四九）九月三日消印、草玄宛鳴鐸手紙。
〔表面〕○先日折角御目にかゝりながらユツクリ御話も出来ず残念しました。中村君も同様、折角上京されたのにと思つています。然しお二人の今回の頑張りには敬意を表します。○木簡臨というこゝになつていますが、小生としては臨という従来／（裏面）の概念の中の仕事でなく、会場芸術としては成功していますがむしろ木簡に仮託した創作だと思つています。表具とマッチして、全体としての近代感が滲んでいた筆を嬉々思ひます。／扱て葉書で無難な話ですが、碧樹書社の同人として推薦したいのですが、御都合如何でしょうか。桑鳩兄や雪邨氏との関係がおりです。又本社の手本に多彩を加えて、書道界の歩前進を図る上から（其以外を俗的結社的心は毫も無し）是非御参加を願ひたく御願する次第です。／○先は不取敢右耳頓首（台風雨被害如何。当方無事）

（註35）『山階通信』昭和六十三年（一九八八）十一月発行 二頁。

（註36）昭和二十五年（一九五〇）十一月十日付十一日消印、草玄宛鳴鐸手紙。先日ハ折角御來柿下さいましたの二何の風情もなく失礼万謝いたします。御二人の帰洛楽しかつた事と拝察。／十二月号手本／①随意参考高岳靈廟碑／②五絶行又ハ草（私は□□の分詩任意）／③現代文書探訪文任意／御疫でしようが廿日頃迄二御願いたします。不取敢右耳頓首 十日」

（註37）鈴木鳴鐸「碧樹風信帖」『蒼穹』第四巻第九号 碧樹書社 二十六頁。「ハ、一五、毎夜、此の日は朝から午三時迄飲む。四時中白、冬眠氏と美術館に到り、江口草玄、中村木子両君に初対面し、入賞を喜ぶ。（以下略）」

（註38）『山階通信』碧樹風信帖 平成元年（一九八九）三月発行 二十五頁。

第三卷第九号	昭和二十三年九月五日	半紙規定二級先頭 半紙随意二級先頭	半紙規定・臨蘭亭叙「懷固知一死生」／ 半紙随意・臨温泉銘
第三卷第十号	昭和二十三年十月五日	半紙規定一級先頭 半紙随意一級先頭	半紙規定・臨高貞碑「即望陳為子爰」／ 半紙随意・臨温泉銘
第四卷第一号	昭和二十四年一月五日	推薦昇級試験・社友	
第四卷第二号	昭和二十四年二月五日	社友半紙随意先頭	半紙随意「無想」
第四卷第三号	昭和二十四年三月五日	社友半紙規定三番 社友半紙随意四番	半紙規定・臨書譜「所從當仁者得」／ 半紙随意・臨雁塔聖教序
第四卷第六号	昭和二十四年六月五日	社友・特選	
三月号	昭和二十五年三月五日	社友半紙規定天先頭 社友半紙随意二番	半紙規定「帷幕之内決負」
四月号	昭和二十五年四月五日	社友半紙随意先頭	半紙随意・臨内景経
五月号	昭和二十五年五月五日	社友・半紙随意部先頭	半紙随意・臨木簡
六月号	昭和二十五年六月五日	社友・半紙随意部先頭	半紙随意・臨木簡
七月号	昭和二十五年七月五日	社友	「移竹喜微陰」
十月号	昭和二十五年十月五日	特別社友同人	臨王羲之九月十七帖
十一月号	昭和二十五年十一月五日	(同人)※表記なし	参考(六級半紙規定)・臨鷗陽詢九成宮醴泉銘「思墜持満」
一月号	昭和二十六年一月五日	同人	参考(第四階梯2)・臨孫秋生造像記

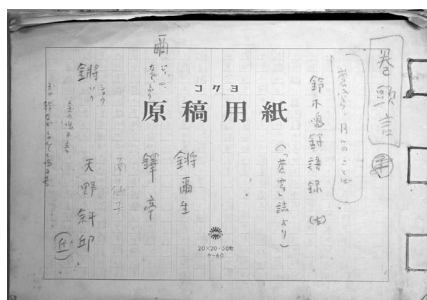
三、草玄にみる鳴鐸の影響

昭和二十二、三年頃から同二十六年(一九五二)一月までの長くても三年程の短期間であつたが、鳴鐸の指導は、その後の草玄の制作や、姿勢に大きな影響を与えたことが窺える。

草玄の鳴鐸への思いは、鳴鐸没後三十七年を経て、草玄が私家版で発行していた『山階通信』で明らかにしている。昭和六十三年(一九八八)から平成元年(一九八九)にかけて五回に亘って記したものの(図15)で、表4に各号の内容を示す。また、それをまとめるために『碧樹』『蒼穹』から鳴鐸の語録等を多量の原稿用紙に書き起こしている(図16 a・d)。

発行年月	表題	内容、字数等
① 昭和六十三年（一九八八） 十一月	鈴木鳴鐸のこと	鈴木鳴鐸略歴および、鳴鐸からの草玄宛手紙の部分抜粋等
② 平成元年（一九八九） 三月	鈴木鳴鐸 碧樹風信帖	昭和二十一年（一九四六）七月創刊の『碧樹』から同二十六年（一九五一）一月の『蒼穹』までに記された「身辺雑事」、「碧樹風信帖」、「柿岡疎画」、「後記」で掲載されていたものの抜粋等

表4 『山階通信』鈴木鳴鐸五部作（図15）内容



c 巻頭言
一三四枚頁（表紙除く）

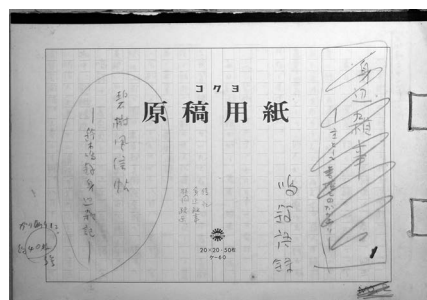
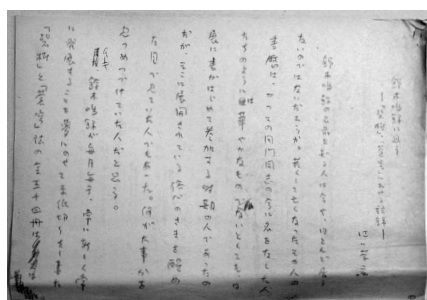
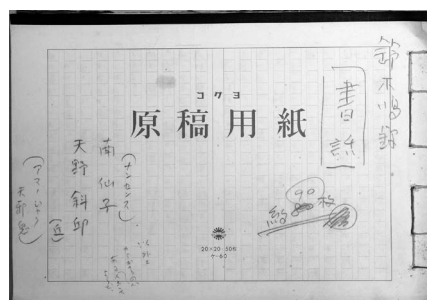


図16 a 風信帖
七三枚（表紙除く）



d 鈴木鳴鐸を思う「原稿」
二四枚



b 書話
一三五枚（表紙除く）



図15 「山階通信」鈴木鳴鐸五部作

③	平成元年（一九八九）五月	鈴木鳴鐸語録（二）——書話——鐸子風調	鳴鐸の用筆論や、書人や各古典についての考え等の抜粋
④	平成元年（一九八九）八月	鈴木鳴鐸語録（三）——「碧樹」「蒼穹」巻頭言（抄）——蒼穹芳釀	鳴鐸の「碧樹」「蒼穹」に掲載した巻頭言の抜粋
⑤	平成元年（一九八九）九月	鈴木鳴鐸に思う——「碧樹」「蒼穹」における語録——	鳴鐸について草玄の考えをまとめたもの（註39）

草玄は、この五回の『山階通信』をまとめるにあたり、手許に残る鳴鐸からの手紙や『碧樹』『蒼穹』の資料だけでなく、娘の鈴木芳子に昭和六十三年（一九八八）十月十日付で手紙を送っている。そこには「鳴鐸先生には、昭和二十三、四年頃の事だったと思いますが、お宅に伺ったことがあるのです。後にも先にもそのとき一回だけの先生とのお出合いであったのですが（註40）、先生お手書きの毎月ガリ切りをしておいて、ガリ版通信『蒼穹』によってもまた、私は多くの裨益を受けました。お手紙も二十通近く私の手許に残されています。また、奥様からのお葉書も一通頂いております。先生のご病氣中のものです。それらを今改めて拝読しまして、感懐一人のものが湧いてくるのです。／私も、昔あのかの先生にならってガリ版通信をときどき出しているのですが、それに鳴鐸先生のことを書かせて頂こうと、目下、下書き中なのです。来る十一月が先生の三十八回忌にあたりますので、それまでにたぶん出来上がるかと思しますので、出来上り次第お送り致しますから、どうかお読み下さればと思っております。」（註41）と綴り、「多くの裨益を受けました」と鳴鐸からの影響があったことを認めている。

また、『山階通信』三冊目（表4③）の末には、「敗戦の混乱と黎明の時期に身を置いて鈴木鳴鐸氏が見つめようとしていた今日の書への視点と鳴鐸視座は、多くの深い示唆に富んで、傾聴に値します。偉大なる思索の人、鈴木鳴鐸と言いたいです。」と、後年の回顧譚ではあるが、改めて鳴鐸の言に同調し、評価していることから、草玄が影響を受けていたことに間違いはない。「当時、越後に住んで、それなりに書への摂取懸命といえども幼いままでの付和を指摘されて、幼きは幼きなりにわが腹に突きささり、深くたまり込む思いであったのを思い出している。」（表4①）（註42）と回想しているように、既に書道界の旧態には疑念を抱き、変わらぬ書道界に反発、抵抗する態度を取りつつあった草玄ではあったが、的確な鳴鐸の助言は、草玄の心を射貫くほどであっただろう。

a. 制作姿勢

まず書に向かう姿勢を見れば、一章で述べたとおり大澤雅休に師事しなかった。鳴鐸に言われた「用筆の素朴さから自然さ」に新しさを見つても、「書的鍛練を無視した行き方」には賛同せず、この方向には進まなかった。この「書的鍛練」ということでは、昭和二十四年（一九四九）三月に草玄が上田桑鳩に師事する以前に「習ふ時の態度としてハ従来得た『手法』『技巧』は一切捨て全く独力で新しい道を開拓するのがよいと思ひます。これは□師「桑鳩」兄を蔑ろにすることではなくて、却って師に新しい希望を持つ事にさへなるものだ」と小生は考へます。師匠の真似をすることが弟子の仕事でないとは嘗ての「書道芸術」の連中の考へでした。尊敬は別の高い角度から払はるべきでしょう。」（註43）と釘刺され、草玄が桑鳩流の筆使いを

（註39） 後年『墨』No.94 平成四年（一九九二）一月号に一部修正して掲載。

（註40） 前章に記述のとおり鳴鐸宅訪問は一回だが、後にも先にもそのとき一回だけの先生とのお出合いであったのではなく、面晤は二回している。

（註41） 旧蔵、送付手紙下書き。

（註42） 『山階通信』（表4①） 三―四頁。

（註43） 旧蔵、昭和二十三年（一九四八）六月六日消印草玄宛鳴鐸手紙便箋七紙め。

真似て作品作りをしていたことを見透かされている。そうしたことが同二十四年（一九四九）三月まで桑鳩への師事が遅れた要因の一つとも考えられることはできるのではないだろうか。

また一方で、前述のように草玄自身の書に対しての考えや近況報告等を記した手書きのガリ版印刷『山階通信』は、鳴鐸が発行した『碧樹』『蒼穹』を「私も、昔あのかの先生にならってガリ版通信をときどき出している」と語っており、費用面のこととは考えられるが、活字ではなく、手軽な印刷手段であるガリ版を選択すると共に、手書きのガリ版から伝わるぬくもり、そしてガリ版に刻みつける意志を感じ、ガリ版印刷という形となったと思われる。

草玄は鳴鐸のこうした姿勢から、この時代の鳴鐸像を二冊目（表4②）の冒頭に、「敗戦、それは世の中が音をたてて変わっていく時代でした。また、まさに黎明のとき至るです。新しい時代が来て、自らもその書業を新しくせずんばとする一方で鈴木鳴鐸は、まわり身近の、新しい時代の先取りをしようとしている書家たちのその根底に、然しまたしてものタテ社会、ピラミッド型の旧態に流れようとしている、いわゆる新しい仕事を看板の書家たちの実態を見すえていたという気がしてならないのです。／この山階通信が、これからしばらく鈴木鳴鐸特集でいこうと思う所以です。書家と書家集団への鈴木鳴鐸危機がより増大の方向で今日なお消えないという、なさけなさを思うからです。」と記す。そして同冊の終わりは、「敗戦の混乱と黎明の時期に身を置いて鈴木鳴鐸氏が見つめようとしていた今日の書への視点と鳴鐸視座は、多くの深い示唆に富んで、傾聴に値します。偉大なる思索の人、鈴木鳴鐸と言いたいです。表紙の『鐸子風調』は『蒼穹』誌上の鳴鐸書から双鉤して、私が仮りに今号のタイトルとしました。（一九八九・五・三 江口草玄）／書譚抄／わたくしは、いわゆる前衛もなく新も古もなく、ただただ、書を思っています。（八九・三・五）^{〔註44〕}と結んでいる。タイトルを双鉤したことも『碧樹』『蒼穹』で手本や競書出品作が写真版でなく、双鉤であったことになぞらえているものと見えるし、後年の草玄の解釈より鳴鐸像を引き寄せての言であるが、鳴鐸の言に自身の考えを投影、重ねていることには違いない。

b. 日展と墨人会結成

戦後、それまでの国家統制が覆り、大きく世の中が変わった時、書道界においても変革が訪れるはずだった。昭和二十三年（一九四八）、日本美術展覧会（日展）に第五部「書」として加わることになるが、五部への参加決定前、既に鳴鐸はその危険性を危惧している。「私は以前にも所謂、書道団体に希望も期待も持たなかった。（中略）藝術社の社友があつた。（中略）書道界なるものの中にあるものを嫌う気持ちがあつて行つたのである。／（中略）ほんとに書を愛する人達だけが残って、ギリ／／結着の所で一体となつた時を待つのがよい（中略）一番大事な事を置いて、何かいろんな生態が見られそうに思えて仕様がなない。」^{〔註45〕}と、芸術としての書を必死に求める仲間として団体の存立があるもののはずが、書以外のところで活動が行われてしまっている状況、それは戦前から変わらぬ書道界の悪習であり、戦後、社会が一変しても変わろうとしない様相を鳴鐸は肌で感じていたのだらう。その感触は、「書が官展になるといつて喜んでゐる人に逢ひました。／恐らく来年の秋あたりから日展の中に（中略）／新人のあなたや、あなたの様に新しい世代の芸術としての書作に心血をそそいでゐる人の登竜門では決してないのです。全国から集まつた数千の作品の中から選ばれる世にも美しい作品のためのものではないのです。思ひ違ひをしないで下さい。／（中略）／書が官展になるを喜んでゐる人に言ひました。思ひ違ひをしないで下さい。書の価値は官展にかかはりません。」^{〔註46〕}と、書の価値（芸術性）と官展に入つて公に書が芸術とされることとは

〔註44〕「五・三」の書き誤りか。

〔註45〕『蒼穹』第三巻第六号 碧樹書社 昭和二十三年（一九四八）六月一日発行 一頁。

〔註46〕『蒼穹』第二巻第十一号 碧樹書社 昭和二十二年（一九四七）十月三十一日印刷 一頁。翌年第三巻第一号から発行日が記載される。

別問題なことであって、官展に入っているから価値があるものと思ってしまうことの勘違いを指摘している。これらを同二十二年（一九四七）十月時点で既に『蒼穹』に記し、戦前の官展の命脈を引きずる日展に参加することでの書が美術として公認されることは、書が書として新しい時代の芸術作品を希求することではないことが、この鳴鐸の言を読んだ草玄の胸に刻まれたことだろう。「五月十一日、文部省主催で芸術院会員の会議が有り、種々問題となつてゐる日展は本年は芸術院主催で今秋開催することに決定した。書道は第五部として参加。（中略）しかし、これからが問題であるので、私は茲に一言したいと思う。／私共は書道の日展参加について希望していなかった。時には日展に加はるかも知れぬと鬼の首でも取つた程喜ぶ一群に対して冷たい言葉を贈つたりしたものである。今時日展でもあるまい。参加した所で何が出来るか（中略）今日では、官僚の保護奨励を有難がらぬ所か、無理な綜合によつて起る紛争をニガ／＼しく思うようになって（中略）私達は従来の書道団体成立の条件や書展の実状を知っている。円満を期すれば低いものになり、高いものを望めば一もめ二もめも起ろう。参加した所で何が出来るかと思つたわけである。／（中略）昔は活動をしたが、もう過去の人で価値の有る作品が出来そうにもない老大家が椅子につく習慣。政治的手腕や特殊な縁故が買われていることや、書道功労者である為手腕の如何が疑はれたり、報恩的処置だつたりする危険。博識家や人気ある人に対する過当評価、派閥的傾向等々で甚しい玉石混淆の感を与えた事が、今度もそのままになりはせぬかという恐れである。／私は書道の面目を賭けて、満天下に信を問う時、一切の行きがかりを捨て、明朗に語り、画期的な新方向を発見すべきだと思ふ。速急に国際連合の様な連合組織を持つたらよい。」^{〔註47〕}と、既に日展が開催される以前に鳴鐸は指摘され、日展で行われようとしている問題、悪弊は草玄の眼に入っていた。「招待作家と若いゼネレーションとの中間層中、書の芸術運動に挺身している一味は彼等の理想と誇りとを捨て、まで出品を肯んじ、尚イブリつづける書壇的封建性に屈服するであろうか。／（中略）どんな立派な組織や形が考えられても結局私共の生きている世界ではそれに入りそれを動かす人の如何が高くも低くも清くもきたなくもする。その人が一人の時はその人を中心とした系列を形づくるが人々（複数）となると個人の力の総和になる所か、往々美が醜と所をかえ、凡作が傑作を斥けた事を想い起こすのである。」^{〔註48〕}と予想し、その通り「昨年の毎日展や日展は新時代の理想的書展であることを誰もが念願したが、一は綜合展の宿命的妥協性から脱れ得ず、一は審査陣云々等によつて其の目的を充分發揮し得なかつたことは返す／＼も惜しまれる。」^{〔註49〕}という現実となつたことに対し、草玄は、自身が書のみに生きようと、「撰取懸命」と芸術としての書を求めているところで、旧態のまま変わらない書道界をにがにがしく思つていたことであろう。そうしたことへの反発が、当時、「若い草玄君のはげしい憤り」^{〔註50〕}として、「書家というものが書道教授の看板で生きて行かねばならぬ間は、世の中の人には本当の書美と言うものを理解しないであろう。「作品を創る」書作家として生きて行ける世の中になればなあと考えている」と、一途に書芸術のみを追求する姿勢の表明と、その現状への憤懣を記した草玄の鳴鐸への手紙となり、それを既に感じ取っていた鳴鐸は、草玄のその気持ちを汲み取り『蒼穹』に掲載したと思われる。

鳴鐸は以前から体調が不調であつたが、昭和二十六年（一九五二）一月号発行後、急病で病床についてしまい、同年十一月には他界してしまうが、その最終号となつた一月号で「僕は、目に余る混乱はあつても、収りのつかぬ破壊があつても、自分や同志とひそかにそれ等を見守つて、新しい思想下にふさわしい仕事にまで発展する日を待つていたのだ。前衛作家に大なる期待をかけていたのだ。然るに近頃、書壇の全貌から考えて、どうも封建的なものへ逆戻りの傾向がないかと思ひ、その一因に日展もなつていぬかと心配なのだ。」^{〔註51〕}と語っている。日展への不信心、そして疑義として草玄は聞き及んでお

〔註47〕 註45に同じ。『蒼穹』第三卷第六号 碧樹書社 昭和二十三年（一九四八）六月一日発行 十六頁。

〔註48〕 『蒼穹』第三卷第十号 碧樹書社 昭和二十三年（一九四八）十月五日発行 一頁。

〔註49〕 『蒼穹』第四卷第四号 碧樹書社 昭和二十四年（一九四九）四月五日発行 二頁。

〔註50〕 鈴木鳴鐸「若い草玄君のはげしい憤り」『蒼穹』第四卷第八号 碧樹書社 昭和二十四年（一九四九）八月五日発行 十九―二十頁。

〔註51〕 『蒼穹』第六卷第一号 碧樹書社 昭和二十六年一月五日発行 十八頁。

り、自身も「価値観の変革をともなった敗戦直後の争乱期、新しさを標榜しながら実は弟子という足かせを基盤にして、それがやはりピラミッド型を形成する書壇の常套に添うように、勢力分野をわが傘下に広げようとするさまざまな動きが出てきた中でその人は、新しい書道芸術運動に身を置きながらも醒めた目で自らと、自らが立つ周囲の動きを見ていたように思います。」^{〔註52〕}として自分の中に蓄積されていった。そして現実となって同年秋、草玄自身に降りかかってくる。第七回日展での桑鳩の題名改変事件、そして新傾向への差別的待遇での草玄作品の落選^{〔図17〕}と、日展の運営が期待していたものから離れ、鳴鐸から聞き及び、危惧していた方向に進んでしまう。ついに当時の書壇での書の純粹な追求は無理である、とうとう堰が切れ、こうした当時の書壇への懷疑と、純粹に書を追求しようとする自身の姿勢とが同調し、草玄の中で確固たる認識へと固まっていたことが、墨人会への結成に繋がっていったと思われる。翌二十七年（一九五二）一月の墨人会結成、新しい時代の「新しい思想下にふさわしい仕事」と先鋭化（当人にとっては純粹化であった）ということになっていったのは、必然であったと考えられる。同二十七年春の墨人会結成挨拶^{〔註53〕}にある「ここに、今までの一切の係累を放擲して、既成の因襲を打破して純粹なものに整理したのに過ぎない」という意志の下、「あくまで純粹芸術家として行動したい」ということが草玄の覚悟でもあったと言える。

こうした墨人会結成、そしてその後の自身の墨人会脱退の行程は、鳴鐸が参加していた書道芸術院を昭和二十三年（一九四八）四月三日に手島右卿、津金鶴仙と共に退会することと重なっている。「去る四月三日、手島右卿、津金鶴仙両雅兄と共に書道芸術院に退会届を提出した。發起人に名をつらねた以上、その間にどんな考への経緯があったにせよ、私共の今回のことは同じ道の方々に対し不信を云々されても一言もない。同院の成立以来、いやもつと以前から私共は私共の在り方について考えてゐたのであり、今基盤が確立してみると、もう役済みとも思えるのである。勿論其の成立に当つても、其の成立後も決して誠意を欠くような事はなかつたつもりだし、考えている所と乖離している点でも随分苦慮して苴荏三日に至つたのである。私共の心配したのは、昔の書道界に見られた離合集散の姿が、今日その俣そつくり表はれているので、同じ眼で冷かに見られることが一つ。又いろんなあて推量から予期しないつまらぬ波瀾などが起ることだ。然し噂は七十五日、其の中に私共の真意が分つてもらえて、所謂世の中の信義でなくて書道に対する信義の一つの方法として取つた態度だと思つていただけると信じている」^{〔註54〕}。こうした鳴鐸の書道芸術院の脱退行動と重なるように、草玄らは研精会を脱退し、墨人会を結成する。鳴鐸の精神は、草玄らの墨人会結成挨拶文にも「私共は、先ず書をあらゆる因襲から解放することが、書芸術の革新、現代書芸術確立の第一歩であると、確信します。そのためには、各人が一個の裸の人間に立ちかえつて、伝統の根元を把握することが根本であると、考えるのであります。／＼（中略）自分たちの環境を、既成の因襲を打破し純粹なものに整理したのに過ぎないのであります。（中略）非難、攻撃、嘲笑、もとより覚悟の前ではあります。また一方には、志を同じくする人々の多いことを信じて疑いません。（中略）／私共のグループは、いつまでも



図17
《釋處默詩（聖果寺）》
昭和二十六年 当館蔵

〔註52〕
「山階通信（表4①） 七頁。

〔註53〕
「墨人会結成挨拶は、『書之美』終刊号付録（昭和二十七年三月十日付）に挟み込まれ、『墨人』創刊号 二一三頁に一部文言の変更を加えて掲載。

〔註54〕
「蒼筤」第三巻第五号 碧樹書社 昭和二十三年（一九四八）五月五日発行 十五頁。

純粹を守りつづけたいと念願しております。(中略)何等政治的な行動をとらずに、あくまで純粹芸術家として行動したいということであります。」と記されていることから、引き継がれていることが窺えよう。

c. 作品制作

作品制作においては既に草玄は、鳴鐸の昭和二十三年(一九四八)六月六日付の手紙で(以上略)小生ハ君の師匠関係は今迄にきて居りませんが恐らく桑鳩学兄に益を受けられたのだと信じています。／上田桑鳩兄に小生の推服して居ることハ非常に努力家で豊富な天分を持つて他面的に書美の追求をして居ることです。戦後そんな事情からか書きすぎて多少筆の調子が一律になつて来てゐることハ否めなと思ひますが、これは同兄の一つのものの完成期に達した為で次への飛躍が却つて約束されるもの、とがめるよりハ将来が期待されると思つてゐます。／貴君ハ桑鳩兄の巧妙な筆致と陶醉して居られるでしょう。筆を少し右に側(仄)して筆の腹を紙にヒツカケながら切々と筆のリズムを楽しんで居られるのを感じます。それハ楽しい事でしょう。／桑鳩兄ハそこへ達するまで随分いろんな方向に道を探ねて彷徨しました。あなたは其の中間のものを一切ぬきにして同じ様な結果を得て居られるのだと思ひます。その結果が「早く熟して」「一調子」な感を持たせるのだと思ひます。作品を生む心よりも手についた手法が見る人の目に映るからだと思ひます。(以下略)と指摘され、草玄の書が桑鳩の垂流状態であつたことが窺われるが、このことに対して草玄も、後年、『山階通信』(表4⑤)の中で「ピシリとする確な指摘の手紙が多い。」「桑鳩用筆におぼれていることへの率直な項門の一針。」と、有頂天な草玄は棹さされ、しおれ、そして発憤した。「当時越後は柏崎に住んで、それなりにわが書の道のことを新しく活性化せずんばと撰取懸命といえども幼いまでの付和を指摘されて、幼きは幼きなりに胸は突きささり、深くたまり込む思いであつたのを思い出す。」(註55)とも同『山階通信』中で吐露している。前掲の同二十三年六月六日付手紙で鳴鐸は、「習ふ時の態度としてハ従来得た「手法」「技巧」は一切捨て全く独力で新しい道を開拓するのがよい(中略)「桑鳩」兄を蔑ろにすることではなくて、却つて師に新しい希望を持つ事にさへなるものだ(中略)。師匠の真似をすることが弟子の仕事でないとは嘗ての「書道藝術」の連中の考へでした。尊敬は別の高い角度から払はるべきでしょう。」とも記し、師を超える「全く独力で新しい道を開拓するのがよい」という助言は、草玄の心に刻まれる。墨人会を結成し五人が集いながらも、それぞれが独力で作品を開拓し、作品制作で差別化を図ろうとして草玄は墨人臭、類型化とは距離をおこうとしていた。

そうした中で草玄の差別化意識が表れた早い時期での作品が昭和三十三年(一九五八)の《和》(図18)と言える。《和》は、日本前衛書展(註56)に出品した作品で、虚勢を張らず、当時の墨人会らしからぬ書として見える。「前衛書でしょ。第一回前衛展、これで、初めてなんですが、前衛展いうたら新しそうなことせんでもいいんじゃないかという、またへそ曲がりがあるわけですよ。やつぱ。これやつぱね。これちよつとは違うんだけれども、そういうひとつを、普通に前衛展だから、よし、どう前衛展なら俺は普通の、なるべくなくなるべく、普通に書こうということはありましたね。こん時は。だから、いつでもへそ曲がっているのかもしれない。」(註57)と、謙遜と照れ隠しとも思える発言だが、これはまさに鳴鐸の号「南仙子」、そして「天野斜邱」の

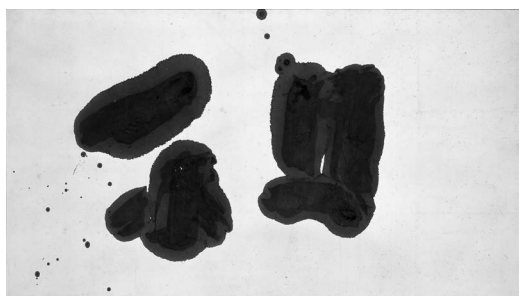


図18 《和》 昭和三十三年

(註55) 『山階通信』(表4⑤) 五頁。

(註56)

日本前衛書展は、銀座画廊の新装第一回展として昭和三十三年(一九五八)二月二十日―二十七日開催。墨人会は中村木子を除く四人の創立メンバー、他に上田桑鳩、比田井南谷、柳莫山、宇野雪村、千代倉桜舟、武士桑風など、前衛書家四十七名が展示。

(註57)

平成八年(一九九六)三月十六日、筆者の草玄氏へのインタビューの中で発言。白寿展図録参照。

本意「ナンセンス」、「天邪鬼」ということを具現化したとみて良いのではないか。《和》以前も、他者との差別化という意識はあったと思われるが、非文字の作品では当時の美術への接近での試作や実験であり、書としての差別化とは言いにくい。そしてその後の墨人会としての主張を訴えるような墨痕的な作品も差別化とは、言い切れない作品だったと言える。美術への接近を止め、書の自立、そして墨人会結成後の運動を進めていく中で、僅か四年後、同三十一年（一九五六）二月二十五日、京都紫明荘での会合「墨人は対社会的にいか活動すべきか」（註58）の中で既に「類型化」の言葉を墨人会の中で確認できる。「墨人」作品傾向の反省として創立会員の関谷義道が作品に対する批評を取り上げて、「最近の「墨人」の（中略）作品や或はその作品に対する批評に表れているものを拾い上げてみますと、（中略）又一面、荒々しいとか、奔放であるとか、蔭気であるとか、重苦しい、混沌として居る、不統一、未整理というような傾向。このような類型化しているとか、マンネリズムにおち入って居るとかということがしばしば指摘されて居りますが、（中略）生きて居る、我々が生きていかなければならないことに対するいろいろな抵抗を、作品をすることによって調節するような現象になった場合にそういつたものが割合と浅い層で、暴力的なような、或はダダ的な傾向が、表面的な強さとか力とかというようなもので出て来て居るのではないだろうかと思うのです。」（註59）と、類型化は制作の浅い層での傾向としている。この類型化は墨人会内部で繰り返し取り上げられるが、一九六〇年代当初から激しく黒く太い墨線で文字を想起させる墨人様式の類型化は、その都度否定されるものの、免れ得ていない。草玄もその中から脱しようとした最初の試作が《和》と言えるように思われる。「普通に前衛展だから、よし、どう前衛展なら俺は普通の、なるべく普通になるべく普通に書く」と、前衛の言葉が流行し（註60）、既に当たり前のような状態の中であるからこそ、前衛を揺り戻し、差別化を図ろうとしたのではなかったかと思われる。ただし、この後、草玄は肺結核で入院、療養する頃でもあり、体力的に低下していた時期でもあることから、そうした要因も《和》が生まれた一因として見られるだろう。

そして病気の治癒後、墨人会復活を果たした墨人会展（一九六二）出品の《偕》（図19）、《関》（図20）は、やはり闘病中「葉包紙に書いていた」ことの延長ではあるが、大作が並ぶ墨人会展の中で、葉包紙寸という小さな寸法の作品を発表するとした差別化の一つと思われる。その後も、墨人会の中の草玄の他者との差別化は続き、周りが黒々としているなら淡墨で、黒々した塊であれば、筆の割れを駆使した淡墨での技術力を見せつけるような作品で、鳴鐸の言う「従来得た「手法」「技巧」は一切捨て全く独力で新しい道を開拓するのがよい」（註61）との言葉を実践しているように映る。昭和三十一年（一九六四）の《不動明王》（図21）は、やはり墨塊ではなく、線、筆の毛のネジレを見せる作品であるし、翌年の《影》（図22）や《風無門自開》（図23）の淡墨表現も、つぶれている箇所があるにしても線としての動きを視認できる作品となっており、一連の作として見ることができる。その後の淡墨表現での筆の毛のワレを束ねてネジレた線として見せつける《関》（図24）、《帰》（図25）などにも見られるし、墨人期終わりの《なんにもない》（図26）、《いしころをける》（図27）、《たったひとり》（図28）に至るかな書きは、小さな紙面に複数の音韻の文字を分かち書きで布置していて、漢字一字を圧倒的な墨塊の様に書く墨人様式とは対極的な表現と言えないか。

図19 《偕》 昭和三十七年



図20 《関》 昭和三十七年



（註58）草玄の他、参集者、井島勉、有田光甫、森田子龍、井上有一、関谷義道、辻太、今岡徳夫、大沢華空、政本達之、「墨人」44号、昭和三十一年（一九五六）四月一日発行、一三三六頁。関谷の指摘部分は一頁。

（註59）註58に同じ。二頁。

（註60）「前衛書道」の語は漫画中にも取り上げられ、昭和三十一年（一九五六）一月二十七日朝日新聞夕刊に長谷川町子「サザエさん」、同年三月二日毎日新聞夕刊に加藤芳郎「まっぴら君」に「前衛書道」の文字が確認でき、当時の流行が窺われる。

（註61）前掲、昭和二十三年（一九四八）六月六日付草玄宛鳴鐸手紙。

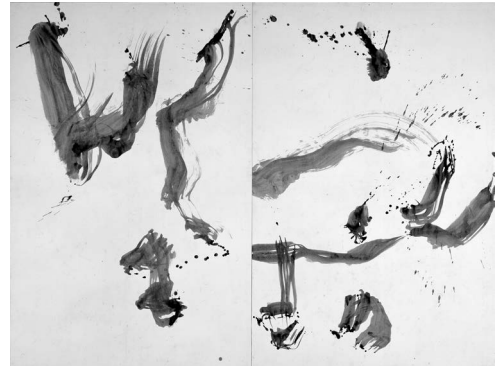


図21 《不動明王》 昭和三十九年 当館蔵



図22 《影》 昭和四十年



図23 《風無門自開》 昭和四十年 当館蔵

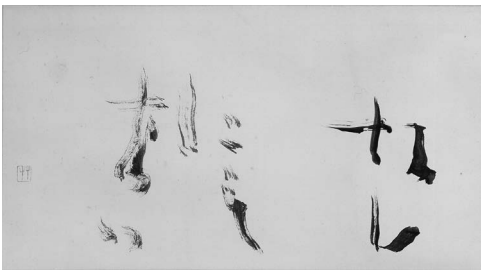


図26 《なんにもない》 昭和四十三年



図24 《関》 昭和四十二年 当館蔵

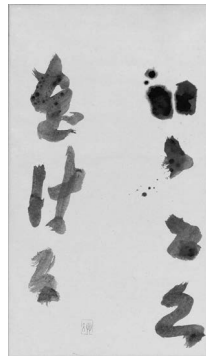


図27 《いしころをける》 昭和四十九年

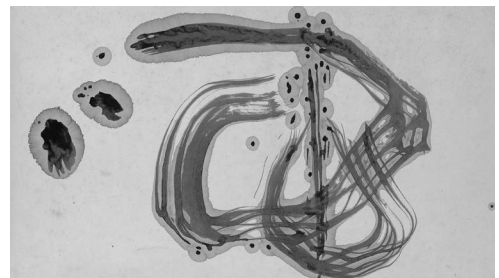


図25 《帰》 昭和四十二年 当館蔵



図28 《たったひとり》 昭和五十年

d. 集と個の問題

作品制作を続ける中、墨人会組織の維持と個人の表現との間にズレが生じて来、そして昭和五十一年（一九七六）六月二十八日、草玄は墨人会を脱退する。これも鳴鐸の「殊に昔から大嫌いだつた政治的なものが復活される気配に、自分の住むところでないと思うようになったのである。」^{〔註62〕}「入っている為に一番好きな仕事以外のことで、小さい、せまい心を自分でいためつける結果になることに気づいたのである。」^{〔註62〕}と記述していたことと同様に、草玄を含む五人で意気軒昂に旗挙げした墨人会であったものの、時の経過や会の組織化と共に、草玄自身「自分の住むところでない」と思い、脱退していくことになる。そこには鳴鐸の言う「集と個の問題」がある。

これまで鳴鐸の草玄への影響を検証してきているが、その中でも一番大きな影響である「集と個の問題」への対応は、生涯を通して一貫した草玄自身の姿勢として見る事ができる。昭和二十七年（一九五二）に既成の書壇との訣別、そして墨人会結成、また、墨人会が濃墨が主流となれば淡墨で、稚拙さを求めればテクニクをとというような差別化を図って、集の中にあっても「個」の意識は絶えずあった。墨人期の同人たちと違う書風、書きぶりは、南仙子、天野斜邸のと号した鳴鐸のナンス、天邪鬼的姿勢と共通すると述べてきた。同五十一年（一九七六）六月二十八日に意志を明確にして墨人会を脱退するの、集との訣別であった。その後の制作でも新たな集を作ることはせず、また集に属さず、あくまでも「個」を通して通常の書壇との関わりを作らなかつたことから言える。

この「集と個の問題」の原点が、鳴鐸との手紙の応答の中に確認できる。これは草玄自身『山階通信』（表4⑤）の中で回顧している。「ところで、『碧樹風信帖』を読んで思うことは集と個の問題である。鈴木鳴鐸という個のために、心なごむうたげの集いに期待しながらその都度はかなくも夢が破れて、集を離れていく彼であった。戦中の離散から解放された旧知の顔ぶれが揃うよるこびで創立に参画した日本書道美術院を脱退し、次に期待した書道芸術院をも退く。ものつくりにおける集とは所詮、障害にこそなれ、必要なものではないということがもう一つ自分に明確でないまま終るのであったが、昭和二十六年三月二十六日の消印で、『書』という芸術が個の個を主とすべきか、全体の個を主とすべきかの見解の相違でいろんな新しい動きが起こって居ると愚考いたし居り、いずれ其の考えについて御意見も伺いたいものと思つています。……』という、わたしへの手紙がある。」^{〔註63〕}と、「集と個の問題」が突然、草玄の問題として擱まれていったのではなく、当時書壇に渦巻いている悪しき状態であったわけである。この指摘に草玄は同調し、自身が在する書道界の問題でもあると改めて認識する。そしてその根源が我が身に起こっていることで現実として公募展に見えてくる。『山階通信』（表4⑤）に続けて「集」の場合、そこでなぜか必ずなされることに公募展がある。実はこの公募展というものが、きまつて諸悪の根源になっていくのである。表現技術に目新しい様式がとられることによって特に戦後はそれが世間の喝采をあびるが、喝采をあびるそのことに隠された、手法（師法と言つてもよい）への信仰がもたらす、或は集めた徒党を利してするところの専制権力化を思うにつけても鈴木鳴鐸は、暗に新しい書の運動の不備を見ていたのではなかつたかと、わたしへの手紙から思えてくるのである。当時、薄々と感じていた「集と個の問題」が自身の脱会、そして時を経て客観的に回顧していると見える。そしてそれに引き続き、「昭和二十年の敗戦、それは世の中が音をたてて変つていく時代であつた。また、まさに黎明のとき至るでもある。新しい時代が来て、みずからもその書業を新しくせずんばとする一方で彼は、まわり身近かの、特に新しい時代の先取りをしようとしている書家たちの、その体の中にまたしてものタテ社会、ピラミッド型の旧態にもどろうと

〔註62〕『蒼穹』第三卷第七号 碧樹書社 昭和二十三年（一九四八）七月五日発行 十五頁。

〔註63〕『山階通信』（表4⑤） 五一―六頁。

してる、いわゆる新しい仕事をあえて客寄せの看板にしようとしている書家たちの実態を見すえていたという気がしてならない。」と語り、「嘗て私たち、古典に随喜して自分を失った時がある。今発展して、各人が各人の道のあるいて、偏固になろうとしている」と言うその言い方にしても、自分を失ったときがあったとして師比田井天来とのかかりへのひそかなる反逆をおわせているが、それはそれとしてここで言う私たちとか各人とは、かつての天来門、上田桑鳩、金子鷗亭、手島右卿、大澤雅休等、つまり戦前の書道芸術社同人の人たちを指しているのではなからうかと思う。とすると当時の書壇における、特に日展にまつわる各人の動きを考え合わせるとき、鈴木鳴鐸の言いたいところのことが見えてこないか。／かつて心を一つに同門であった人たちが今や各人別々、足を引っぱり合っていると聞いたかったか。書が日展というところに初めて参加するということでは浮き足だっていることをも含めて、集の力にたのもうとしている、集を利してのいじましい権力争奪への批判の目であったのではなかったか。」^{〔註64〕}と鳴鐸自身が参画していた書道藝術社、そして戦後の書道芸術院の間達でさえ客観的に醒めた目で鳴鐸は見ていたと草玄は分析している。

第七回日展での差別的待遇に対して卑屈とも中庸とも言える態度をとった桑鳩の態度に、草玄らは思うところがあり、桑鳩の元も出、墨人会を結成するわけだが、そうした書壇の勢力地図や実際の状況が客観的に見えてきて、鳴鐸への評価となっていた。「運動のそれが集であることによって、だからそれは或は避けられないことかもしれないのだが、いつのまにか兆してくるものに、その表現が目新しい様式をとればとるほど、様式の新しさに隠された手法への信仰がもたらす、或は信仰させることによる定型化を思うにつけても、暗に書道芸術運動の不備を見ていたのではなかったか。／それこれ見ていると、鈴木鳴鐸氏は、書道芸術社の中にあってもワクの外に住んでいたように思えるのである。自分の足許ゆえにとかく目をつぶりがちな、或る、しかし盲点たるべきところを、しかと見すえていた人であったのではなからうか。」^{〔表4①〕}^{〔註65〕}と、自分も通って来た墨人の運動と重なり合い、実感するところとなつて草玄の口から発せられた言と言えまいか。同門でも客観的視座によって批判する鳴鐸の姿勢を草玄は学んでいる。鳴鐸の言を借りながら、それは実際は草玄が在籍した墨人会のこの吐露とも思えてくる。鳴鐸を分析しながらも、それは草玄自身がしてきた活動の振り返りの分析でもあり、墨人会を結成、そして脱退してきた中で、昭和二十六年（一九五二）の鳴鐸の言を実感、そしてその生き様を「明確でないまま」でなく、明確にして墨人会脱退以後歩んできたと言えよう。だからこそ墨人会脱退一年半後の同五十二年（一九七八）三月三十一日に発刊された『草玄ことば書き』の刊行にあたっては、その巻頭に「二十五年前に自ら五人の手で作った書の団体墨人会をわたりは昭和五十一年の六月に、脱退した。今、身にあふれる空気が楽々と揺れて、ここ山階の里はまこと居心地がいい。」と、きれいさっぱりな身で新たな書の希求していく展開を、一人で探っていくと、文字通り、個の芸術を求め直し始めたと言いきれよう。

『蒼穹』が途絶える三号前には、草玄ら墨人会の理論的後盾となつていく京都大学井島勉の言葉も鳴鐸は引用し、「書的美」に出てくる京大美学部主任の井島博士の真^{マコト}当な考えをよく／＼玩味してもらいたいということ、同じ事を私の角度から言おうとしたのであったが……。／前号にも書いたが、その感覚について私たちは個人的に絶対である。井島博士は「人間は常に個人として生きるほかない」といつている。個性性と普遍性とを同時に所有していて、普遍の中の個と、個の中の普遍の上に芸術があるのである。上の順と逆は用筆とある、所の点画についてのべるつもりであったが、如上が分かれば贅言であろう。」^{〔註66〕}と、芸術における個の優位性、絶対性を鳴鐸は支持しており、草玄も「個」の上に芸術があると再確認しての脱退、その後徒党を組まず、一個人で活動を貫いてきたことは当然のなり行きであったわけである。

〔註64〕『山階通信』(表4⑤) 七頁。

〔註65〕『山階通信』(表4①) 三頁。

〔註66〕『蒼穹』十一月号 碧樹書社 昭和二十五年（一九五〇）十一月五日発行 一頁。同年一月号から巻号表記はしなくなる。

四、終わりに

これまで草玄の学んできたこと、そして、その中での鳴鐸の影響の痕跡を草玄の制作姿勢や作品に探ってきた。

草玄が「鈴木鳴鐸の名前を知る人は今や、ほとんど居らないのではないだろうか。若くして亡くなったその人の書歴は、かつての同門同志の今に名をなした人たちのようには華やかなものでないとしても、晩年、日展に書がはじめて参加する時期の人であつたのだが、そこに展開されている俗心のさまを醒めた目で見ていた人でもあつた。何が大事かを見つめつけていた人だと思う。」(表4⑤)^(註67)と語るように、書の本質を求めて書団体の離合集散とかかわらないところで、しかし、短い期間ではあつたかもしれないが、その核心を見、静かに身を処していたことは、草玄も共鳴し、「集と個の問題」に行き着く。書の制作を自身の処し方に求めている禁欲的な姿がそこにある。「集と個の問題」の帰結は、創立メンバーの墨人会脱退という衝撃的事態を起こすが、当人には書を希求した支柱の確認と実践であつたと言えよう。

また、前後するが、墨人会脱退直前の昭和五十一年(一九七六)六月五日、京都学生書道連盟主催の講演会で、草玄は「書にまつわる基本的ことがら」を発表し^(註68)、その中で「洞見」ということを語っている。「他の人からいろいろと聞くことがいけないというのではないのです。聞いてもそのことの根底に置かなければならないことは、それは自分の目で自らつかんだのではないのだぞ、参考にはなるけれども絶対に自分の目ではないのだぞという、そこだけはしっかりしておかねばならない。そのためにはいつも、他人の目を借りてきて自分の目と重ねないことです。自分の目で『見ぬく』ということです。自分の目で『見る』ということが書のすべての原点です。「洞見」ということこそ書のすべての絶対条件です。」ということからも、他人の目に自分の目を重ね合わせるのではなく、「自分の目で『見ぬく』」という、書人としての意識は、単純に鳴鐸の言を越え、個の「我」の意識を強く自覚していったことが窺えてくるのである。

このように見えてくると、初期書学期の鈴木鳴鐸の江口草玄への影響は、僅か三年程であつたが、その後の書人としての制作姿勢に大きな影響を及ぼしていたことが明確に確認できると考えるのである。

最後に、本稿を執筆するにあたり、多大なる御協力を賜りました江口澄江様、久幸様、磯部南海雄・一美様御夫妻に改めて感謝申し上げます。

(新潟県立近代美術館 専門学芸員)

【参考文献】

- ・『健筆』第二卷第二号(昭和十三年(一九三八))、第三卷第三、十二号(同十四年(一九三九))、第四卷第一、八、十、十一号(同十五年(一九四〇))、第六卷第一—三、八、十、十二号(同十七年(一九四二))、第七卷第一—三三号(同十八年(一九四三)) 青葉書道院
- ・『書勢』第二卷第三、四、六、七、十二号(昭和十三年(一九三八))、第三卷第一、三、七、八、十、十二号(昭和十四年(一九三九))、第四卷第一、二、四、六、九号(同十五年(一九四〇))、終刊号(第七卷第四号)(同十八年(一九五三)) 書学院
- ・『碧樹』・『蒼穹』創刊号—昭和二十六年一月号 青郷書院(碧樹書社) 昭和二十一年(一九四六)七月五日印刷—同二十六年(一九五二)一月五日発行

(註67) 『山階通信』(表4⑤) 二頁。

(註68) 昭和五十一年(一九七六)六月五日、華頂短期大学で開催。私家版『書——ことばの姿——』(昭和五十四年(一九七九)五月三日発行)に掲載。

- ・『書之美』創刊号―第四十六号 研精会 昭和二十三年(一九四八)四月一日―同二十七年(一九五二)三月一日
- ・『墨人』創刊号―第二三五号 墨人会 昭和二十七年(一九五二)四月一日―同五十一年(一九七六)
- ・『書跡名品叢刊』第七三回配本Ⅱ東晋・王羲之 興福寺断碑／唐・賀知章 孝經』二玄社 昭和三十六年(一九六一)
- ・江口草玄『書―ことばの姿―』昭和五十四年(一九七九)五月三日
- ・棟方志功『板極道』改訂第八版 中央公論社 昭和五十四年(一九七九)四月三十日
- ・『定本 大澤雅休 大澤竹胎の書』教育書籍 昭和五十六年(一九八一)八月十日
- ・『近代日本の書 現代書の源流をたずねて』芸術新聞社 昭和五十九年(一九八四)四月二十日
- ・『卿亭(兄弟)の人鈴木鳴鐸』・小林抱牛『鳴鐸先生遺稿について』／中井史朗『書人鈴木鳴鐸のこと』／『遺稿』『独立書人団研究集録』No.9 独立書人団事務局 昭和六十三年(一九八八)十一月二十七日
- ・江口草玄『鈴木鳴鐸のこと』『山階通信』昭和六十三年(一九八八)十一月
- ・江口草玄『鈴木鳴鐸 碧樹風信帖』『山階通信』平成元年(一九八九)三月
- ・江口草玄『鈴木鳴鐸語録(二)―書話―』『山階通信』平成元年(一九八九)五月
- ・江口草玄『鈴木鳴鐸語録(三)―『碧樹』・『蒼穹』巻頭言(抄)―蒼穹芳釀』『山階通信』平成元年(一九八九)八月
- ・江口草玄『忘れられた書家・鈴木鳴鐸に思う―』『碧樹』・『蒼穹』における語録―』『山階通信』平成元年(一九八九)九月
- ・『近代の書PartⅡ 書道芸術社の人々』『書道ジャーナル増刊号』季刊19号 書道ジャーナル編集室 平成元年(一九八九)十一月十日
- ・江口草玄『鈴木鳴鐸に思う』『墨』94号 芸術新聞社 平成四年(一九九二)二月二十一日
- ・『鈴木鳴鐸先生語録集』(※草玄が鈴木鳴鐸を記した平成元年の『山階通信』四冊を活字化したもの) 独立書人団栃木支部長酒井真沙 平成十年(一九九八)十月二十四日
- ・宮澤昇編著『書道雑誌文献目録』木耳社 平成二十六年(二〇一四)七月二十五日